Vol.3 〈ISSN 2187-2694〉

今日の資本主義を批判するために
――『マルクスと商品語』を読む

東京外国語大学 国際日本研究センター主催
国際シンポジウム報告集

2018 年 6 月 30 日（於 / 東京外国語大学 本部管理棟中会議室）

＜解題＞
シンポジウム「今日の資本主義を批判するために
――『マルクスと商品語』を読む」
友常勉

2018年6月30日に東京外国語大学で開催されたこのシンポジウムは、前年の2017年に刊行された井上康・崎山政毅両氏の共著『マルクスと商品語』の到達点を関連領域にとどまらず、異領域に開いて読み解こうとするものであった。そのために、浅川雅己（札幌学院大学、経済学）、真島一郎（文化人類学、東京外国語大学）、大橋完太郎（神戸大学、表象文化・芸術論）、中村勝己（中央大学、イタリア政治思想史）のベスト・メンバーにご参加いただいた（司会は友常）。物象化論や価値論といった従来の『資本論』にかかわる論点の再検討はもちろん、同書の白眉である「商品語の場」、そして現代数学と集合論が参照されることで示されるその論理的位相の今日性、それによって提示される現代グローバル資本の相貌、さらにアントニオ・ネグリの理論と実践との接続といった、この討議によって獲得された多くの稔りについての詳細は、シンポジウム報告本文に譲る。

ただし、同書のマルクス『資本論』の原典読解によって抽出された原理論的な商品論は、これにつづく「利子生み資本」の再構築を通したグローバル資本主義批判のための必須の導入として位置付けられていたことは指摘しておきたい。すなわちこのプロジェクトは、あらかじめ『資本論』の精緻な批判的読解にもとづいて現代グローバル資本主義批判の理論的枠組みを手に入れることを最終的な目標としていたのである。『マルクスと商品語』に続く、井上・崎山両氏による二番目の共著である、マルクス『資本論』における再生産論の誤謬を指摘した『マルクスと価値の《目印》という誤謬』（2017年）でも触れられていたその課題については、刊行が予告されている三番目の共著『マルクスと架空資本 Marx und das fiktives Kapital』で展開される。

ただしこの間に、このプロジェクトを崎山氏と進めてきた井上康氏が2021年9月4日に亡くなられたことを報告しなければならない。井上氏は、ガンとの闘病を続けながら、『マルクスと架空資本』の仕上げに全力を注いでいたと聞く。氏は、『加藤正著作集』（全3巻、ユニテ、1989年）の刊行、非言語世界についての画期的な考察、そして本プロジェクトなど数々の業績を残された。その最後のお仕事に立ち会い、謦咳に接することができた幸運に感謝したい。なお、利子生み資本論・架空資本論の内容については、私たちは、先行的に、2021年11月に高麗大学で開催された東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会の公募パネルで議論する機会を持った（Zoonによる開催）。そのタイトルとプロポーザル、最終的な報告者は以下の通りである。

COVID-19以後のグローバル資本主義とデジタル・モノポリーの加速
:マルクス『資本論』の読み直しを踏まえて

報告:浅川雅己、崎山政毅、中村勝己、司会:友常勉

本パネルは二つの目的を有する。一つは、「新MEGA」刊行を踏まえた世界的な「マルクス・リバイバル」の理論的達成を踏まえて、COVID-19のパンデミックを経験し、GAFAMなどデジタル・モノポリーが進行するグローバル資本主義の現在を日本と韓国の経済・社会分析からアプローチすることである。第二に、「マルクス・リバイバル」の理論的達成を、商品論と蓄積論のあらたな展開のうちに求め、この理論的成果を検証し、共有することである。その手がかりとするのは、井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』(2017年)、同『マルクスと「価値の目印」という誤謬』(2021年)である。これらの二つの著作は「新MEGA」の読み直しにもとづいて、マルクス『資本論』が有する根源的な資本主義批判の射程を明るみに出した。それはグローバル資本主義の分析のために、「利子生み資本」をめぐるマルクスの研究が不可欠であることを示すものであった。本パネルは、この理論的成果を含む「マルクス・リバイバル」が提示しているアプローチを手がかりとしつつ、日本と韓国の資本主義の現在を、移民、階級格差、東アジア国民国家の変容などの観点をまじえて、再把握しようとするものである。それによって、COVID-19後の東アジア社会の行方を見定めたいと考える。

ここに示されているとおり、マルクス『資本論』の再検討というプロジェクトは、東アジア社会においても、その現在を批判的に把握するための必須の作業である。その意味で本報告書はいまだ中間報告である。そして中間報告であるために、驚異的な速度で成果を公刊してきた井上・崎山氏による進行中のプロジェクトをどの段階で「切り取って」発表するかで悩んだことが、シンポジウム開催から6年を経ての発行となった理由のひとつである。もちろん企画責任者である友常の怠慢は大きい。このことはシンポジウム登壇者のみなさんには心からお詫びしたい。

なお、本シンポジウムは、科研(基盤研究C)「ケガレ-キヨメ体制の地域間比較とその今日的展開に関する基礎的研究」(研究代表・友常勉、2018～2023年)にもとづいて開催された。またこのシンポジウム報告書は、国際日本研究センターの国際シンポジウム報告書の一環として発行される。

2024年3月31日　友常勉(東京外国語大学)

シンポジウム
「今日の資本主義を批判するために――『マルクスと商品語』を読む」
2018年6月30日（於 / 東京外国語大学 本部管理棟中会議室）

報告者

井上康（予備校講師）
崎山政毅（立命館大学教員、ラテンアメリカ思想史、地域研究）
浅川雅己（札幌学院大学教員、経済学）
真島一郎（東京外国語大学教員、文化人類学）
大橋完太郎（神戸大学教員、芸術論・表象文化論）
中村勝己（中央大学兼任講師、20世紀イタリア政治思想史）

司会

友常勉（東京外国語大学教員、日本思想史）

司会　「『マルクスと商品語』を読む」シンポジウムを開催いたします。ご報告をいただく方々にはレジュメをご準備いただきありがとうございます。著者である井上康さん、崎山政毅さんのお二人には東京まで来ていただきました。心からお礼申し上げます。タイムテーブルについてご説明いたします。最初に第一部は、四人の方々から20分から30分程度のご報告をいただきます。そのあと一〇分くらいのブレイクをいれまして、第二部として、著者のお二人からのリプライをいただきます。最終的には5時半ぐらいに終わりたいと思います。それでは、早速最初のご報告をお願いしたいと存じます。まず、札幌学院大学教員で経済学を専門にされていらっしゃいます、浅川雅己さんです。MEGAの編集等々やマルクスの草稿研究にも深く関わっておられます。それから、図書新聞にいち早く同書（『マルクスと商品語』）の書評を掲載されていらっしゃいます。お手元にレジュメがあるかと存じますので、それを見ながらご報告をお聞きしていきたいと思います。では、浅川さんどうぞよろしくお願いいたします。

報告１　浅川雅己

札幌学院大学から参りました浅川です。レジュメの方は、A4の「『マルクスと商品語』に寄せて」というものになっております。先ほど、司会の友常さんからもご紹介がありましたように、たまたま図書新聞さんからこの本の書評のお話をいただいたとき、立命館の紀要にお二人が掲載した論文を読み始めていたところでした。そこで、これは書評を引き受ければ贈呈していただけると思い、絶対引き受けようと考え、一も二もなく引き受けさせていただいたということです。今日お越しいただいた皆さんに書評も一応資料としてお配りさせていただいているんですが、この書

評はあんまり意味がないかなと思っています。というのは、この本を書評するとなったということで、私の周辺のMEGAにも造詣が深いある先生にこの本をちらっと見せたところ、「ああー」と言ってそれっきりだったんですね。その理由はすごくよくわかるんです。書評の冒頭にも書きましたけれども、価値形態論や商品論でものを語る方はたくさんいらっしゃるんですが、そのかなりの部分がそこだけでなにかを引き出そうとしています。『資本論』全体や、マルクスが資本主義社会とどう立ち向かったか、あるいは崎山さんたちもおっしゃってますが、利子生み資本について、現代資本主義を分析するための手がかりをそこに求めるという問題意識なしに、商品論だけで価値形態論だけでなにか結論めいた、論文のようなものが書けるんじゃないかと思って書いてらっしゃる方が、残念ながら多い。そこで、それを知ってる先生方は、どうせまたその類の本だろうと思ってしまったんだろうと思ったので、私の書評は、そういう方たちにむけて、そうではないので是非読んでくださいというだけで書いたものです。今日集まった皆さんはこの本にいろいろ面白さを感じて、あるいは期待するものがあっていらしてくださっていると思うので、そういう意味では報告者の自己紹介程度に思っていただければよいかなと思います。

前置きはそのくらいにしまして、本題に入らせていただきたいと思います。四つの項目を立てさせていただいております。一番初めの部分ですが、これが本当に必要かどうかはお話してみないとわからないところなんですね。前置き的にこの部分の意図を説明します。

報告者自身は、ものを考えたり、あるいは多少なりとも社会的な事柄にコミットするようなことがあった場合には、常に出発点にしている事柄なので、それと、井上さんや崎山さんが書いておられたことと、こちらからみるとかなり接点がありそうな気がしたんですね。ただ、最後にも書きましたけど、それが本当にかみ合うのかどうかは、自分の方からは完全には分かり切れないものだったので、こんなことを考えている人がいるんですと。それについてどう思いますか、ということをちょっとお聞きしたいなということで書かせてもらった部分です。

有井行夫さん、駒澤大にいたんですが、今年三月に亡くなられました。パーキンソン病との闘病の甲斐なく亡くなられたんですが、この人の定義によれば、ヘーゲル『精神現象学』の本来の課題、目的は、意識の有限性を確証すること、意識経験学であったと。意識経験学は認識の端緒としての意識、「感覚的確信」の正当性の確認であると同時に、存在世界に対する意識の有限性の確認であり、したがって意識自体を派生させている存在世界における人間実践の権利付け――存在主義への移行の必然性の確認――でなければならなかった。しかし、ヘーゲルは意識の有限性の確認をあいまいにしたまま、意識経験学の形式の下で存在論を展開するという自己欺瞞に陥ることになった。この問題はヘーゲルに即して「真無限」と「悪無限」の概念においても見いだすことができる。悪無限というのは、自己の外に他者を持つ。悪無限における有限性の否定は、この他者としての他者の否定であり、この否定の中に自己関係はない。この否定自体が否定の対象であるあれこれの有限性によって規定されており、孤立的・限定的である。したがって、次々と現れるあれこれの有限性に対して際限なく否定を繰り返すことになる。それに対して、真無限というのは〈他なるもの〉は自己であるという態度が貫かれる。〈他なるもの〉の他者性を否定して自己として受け取ることがこの否定の内容である。主体は、この否定の中で自己自身と関係する。対象のよそ

よそしさを否定して自己なるものとして措定するのである。これは自己帰還であり、円環運動である。しかし、それは単なる原点回帰ではなく、対象を媒介とした自己への帰還であり、自己の豊富化である。ヘーゲルとマルクスの差異は、対象の〈よそよそしさ〉と対象性一般、対象性そのものとの区別にある。ヘーゲルは事実上この区別を忘れ、〈よそよそしさ〉とともに対象性一般を否定する。しかし、そんなことができたということは、そもそも、対象とされていたものが実は、はじめから自己自身であったということに他ならない。もはやそこには、真無限はもちろん、悪無限すら存在しない。

『マルクスと商品語』においては、「対象世界」の豊饒性に対して「人間語の世界」の有限性が指摘されている。ラッセルやデリダが言語世界の有限性を超出しようとして超出できず、結局は言語世界の限界内を徘徊して終わることが指摘されている。報告者としては、本書のこの議論は、上で述べた事柄と呼応するものであるように見える。しかし、互いの思想的来歴の違いもあって確証が持てない。とはいえ、ここには討論の前提として確認すべき事柄も含まれているように思えるので、著者のご意見を伺いたい。ということです。

第二項目です。「共通のもの」と「第三のもの」の区別。これは商品論の中身に入りますが、価値等式の二項である二商品に「共通のもの」は価値であり、「第三のもの」は、区別のない人間労働≠抽象的人間労働であって、商品AでもBでもあり得るが、CでもDでもあり得る。そしてあり得るだけであって、それ自体としては、そのどれでもない。だから、二つの商品それ自体とは区別される第三のものなのである。それ自体は価値ではないのであって、この社会的実体が商品に対象化されて結晶となったものが価値なのである。価値等式(レジュメでは「交換価値」)を通じて二つの商品に見いだされる共通のものは、価値なのであって抽象的人間労働ではない。報告者は、こうした区別自体は知っているつもりではあったが、この区別自体が持つ重要性は決して十分には理解できていなかった。この区別は、「すべての商品の貨幣性」論、「共同行為」論、「利子生み資本」論に通じる重要な意味を持つことを、本書を通じてあらためて確認することができたし、さらに考察が深められるべき点が多く残されていることに気づかされた。

三項目ですが、「貨幣の生成」論と「すべての商品の貨幣性」論。交換過程論こそが、「貨幣の生成」を直接議論する場である以上、それ以前には、その前提としての「すべての商品の貨幣性」が論じられるべきだというのは説得的である。可能性としては、どの商品も一般的等価物になりえるにもかかわらず、かの市場圏では商品Aが、この市場圏では商品Bが、というように、それぞれの市場圏で特定の商品が貨幣としての地位を占めるようになる理由は、交換過程論の共同行為論によって明らかにされる。この共同行為は、次項でみるように商品所有者たちの共同行為であり、物象的依存関係の下での特殊歴史的なGemeinwesen[レジュメでは共同態]の形成創出過程でありながら、その内容は、まったく彼ら自身によって自覚的に創出されるものではなく、物象の運動の帰結を主観的に自分たちの共同行為として受容することでしかない。

四、「人格の物象化」(「生産諸関係の物象化」)。著者は、「人格の物象化」は、本来的に、したがってマルクス自身にとっても概念として成立しうるものではなく、比喩的表現以上の意味を持つものではないという。その根拠として、人格の物象化にあっては、何が物象に転化するのかが明確

ではないと主張する。人格自体が物象に転化するわけではないはずだということだろう。確かに、著者が指摘するように物象の人格化においての〈人格になるもの〉は物象以外ではありえず、この点は明確である。問題は、人格の物象化において〈物象になるもの〉は、何かということである。本書では、『資本論』初版から次のテキストが取り上げられている。

(0)《私的生産者たちにとっては彼らの私的労働の社会的な諸規定が労働生産物の社会的な自然被規定性として現れるということ、人々[Personen](人々と訳されていますが、Personen、諸人格)の社会的な諸生産関係が諸物象の対相互および対人的な社会的諸関係[gesellschaftliche Verhältnisse der Sahen zu einander und zu Pwrsonen]として現れるということ〔…〕。社会的総労働に対する私的労働者たちの諸関係は、彼らに対立して対象化され、したがってまた彼らにとっては諸対象の諸形態において存在するのである。》

ここで榎原均氏の言うところの「人格の物象化」の内容がこのテキストのそれであることが指摘されている。報告者もこの点に同意する。そのうえで、本書が取り上げる、「人格の物象化」について資本論以前のマルクスのテキスト(「剰余価値学説史」、「直接的生産過程の諸結果」など)についても同じことがいえると考える。つまり、「人格の物象化」という表現が表しているものは、より正確には「生産諸関係の物象化」である。

この点に関して、現行版の次のテキストが重要である。

(1)《そもそも使用対象が商品となるのは、使用対象がたがいに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体が社会的総労働をなす。生産者たちは彼らの労働生産物の交換を通してはじめて社会的接触に入るから、彼らの私的諸労働の特有な社会的性格もまたこの交換の内部ではじめて現れる。あるいは、私的諸労働は、交換によって労働生産物が、そしてまた労働生産物を媒介として生産者たちが、結ばれる諸関係を通して、事実上はじめて、社会的総労働の諸分岐として自己を発現する。だから生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関連[die gesellschaftlichen Beziehungen]は、そのあるがままのものとして現れるのである。すなわち、人格と人格とが彼らの労働そのものにおいて結ぶ直接的に社会的な諸関係としてではなく、むしろ、諸人格の物象的な諸関係および諸物象の社会的な諸関係として現われるのである》(K, Ⅰ,S.87:強調や下線は断りのない限り報告者によるもの)

人格の物象化において〈物象になるもの〉は、労働する諸個人が結ぶ社会的な連続性、社会的な関連である。労働が直接に社会的労働である場合に限り、諸個人は、労働そのものにおいて直接に社会的関連を結ぶことができる。これに対し、私的諸労働の社会的関連は、次のような変容を被る。私的労働が相互に排他的孤立的に営まれる結果、そこにおいて成立する彼らの自覚的な相互関係も私的所有者(抽象化された人格)同士の形式的な関係以外ではありえず、互いの私的諸労

働の具体的内容は相互に不可視化され、彼らの自覚的な社会的実践は、単なる対象に対する意思的支配一般に、すなわち「所有」に還元される。その一方で私的諸労働の実在的で内容的な関係は、彼らの自覚的実践からは独立した諸物象の運動によって担われることになる。

以上の内容は、「生産諸関係の物象化」と表現するのが適切であり、「人格の物象化」という表現が概念としての成熟度を疑わせるものであることは、本書の指摘のとおりである。報告者は、マルクスも資本論においてこの表現を用いない叙述に書き換えようとしたがそれが十分になされなかったため、一部にこの表現が残ったものと考える。

以下、「生産諸関係の物象化」にかかわるテキストを、直接その表現がなくとも内容的には言及されているテキストも含めてさらにいくつか取り上げ、検討したいと思います。ただし時間の制約もあるので、いちいち全部読み上げることはせずに、これらのテキストを通じて何が言いたかったかについて、まとめながら話していきたいと思います。番号にして、二番から六番までのテキストを挙げております。(2)、(3)、(4)、(5)は『資本論』、最後の(6)だけ『経済学批判要綱』からです。これらを通じて、先ほど紹介した『資本論』の文章に基本的なことはそこで述べられているんですけれども、それを展開していった結果、4/5のところで、利子生み資本の話が出てきております。(3)と番号を振ったところです。

> (3)《われわれがG―G´で見るのは、資本の無概念的な形態、生産諸関係の最高度の転倒と物象化、すなわち、利子を生む姿、資本自身の再生産過程に前提されている資本の単純な姿である。それは、貨幣または商品が再生産にはかかわりなくそれ自身の価値を増殖する能力――最もまばゆい形での資本の神秘化である。》(K. Ⅲ. S. 405)

利子生み資本形態が生産諸関係の最高度の物象化であるという指摘が行われている。生産関係の物象化、人格の物象化という言葉はいろいろと座りが悪いというか、はたしてそれでいわんしていることを正確にあらわせるのかどうかという疑義が著者から提起されています。そこには言っている根拠があると思うんですが、それによってもしも生産関係の物象化が一緒に流されてしまうとしたら、それは著者がもくろんでいる、利子生み資本の議論をベースにしてそこからさらにいくつかステップアップしていかなければならない、今の金融化という言葉で象徴されるような現代資本主義のあり方を批判するということを考えた場合には、生産関係の物象化ということを人格の物象化ということでいわんとしている内容が、実はそういうことが言われているのではないかということを押さえておくことが、重要となってくるのではないか。そういう意味では、人格の物象化という表現に仮に問題があるとしても、しかしそこでいわんとしている内容はくみ取っていく必要があるだろうというのが、最後のところで述べたかったことです。

最後に、5/5のところで、(6)の『要綱』の引用のところ、これは『資本論』に先立つテキストで、そこにいろいろ理論的にも表現においても熟していないところはあるかもしれませんが、『資本論』のなかでこの問題についていおうとしているところが、かなり凝縮したかたちであらわれていると思うので、最後にこのテキストについて、報告者としての解釈を述べることで締めくくりとさ

せていただきたいと思います。最後の引用を読み上げさせていただきます。

> 社会的関係を自覚的・能動的に形成する能力が、商品生産においては、物象の能力に転移し、物象の運動を介して形成される物象相互の関係として成立し、諸個人はこれに支配される。

(6)では触れられていないが、このとき同時に、諸個人の社会形成行為は、物象によって内容を規定された関係をその内容を問わず丸ごと承認する形式的な相互承認に形骸化する。さらに、引用(4)でみたように、物化――物象化とは区別される物化ですね――によってこの生産関係の歴史性が不可視化されて資本関係の外面化としての利子生み資本が成立する。

> しかし、このような一連の事態も、根源的には労働する諸個人が労働を私的な行為として遂行することによってもたらされたものである。つまり、自分の社会形成主体としての能力が否定されるような社会を我々自らが形成している。その意味では、我々の社会形成主体としての能力は消失したのではない。しかも、物象の運動の展開は、人間に対する物象の支配を強化する一方ではなく、商品所有者の相互承認によっては正当化しきれないような事態を招くことになる。例えば、利子生み資本は、資本関係の外面化を完成させその歴史性を不可視化するが、同時に、「自己労働にもとづく所有」という「原則」のあからさまな否定である。つまり、利子を生む金融商品等を所有しているだけで所得があるというのは、「自己労働にもとづく所有」という私的所有の「原則」というものを、事実でもって否定している。また、物象の運動の進展は、物象の運動制御の必要性とそのための手段を発展させる。物象の運動自体が、われわれの主観に対してそれを正当化する「論理」からはみ出すと同時にこの運動の制御を現実の課題として提起することになるのである。

ちょっとこれは説明が必要かもしれません。例えば、そういうものがどこまで資本主義の批判として有効かどうかということですね。例えば投機マネーに対して投機タックスのようなものが提起されるとか、そういうようなかたちで利子生み資本の運動、資本関係の外面化に対して、これをなんとかしなければならないということで様々な機関が動き出している。これは単純に資本主義の発展によって、あるいは物象化や物化によって支配が隠蔽されて、われわれが支配されていることに気づかなくなるというような、そういう話ではないんだと。資本主義自身が実は自己批判をつくりだして、自分に対する批判的な意識を生み出していくという側面がここにも実は確認することができるだろうと。利子生み資本論のある意味のひとつは、そこのあるのではないかということが報告者の理解であるということです。これで以上です。

司会　浅川さんありがとうございました。改めてこの本から受け取った成果という部分と、それから「生産諸関係の物象化」の理解という話と、利子生み資本そのものが資本の自己批判的な表現を伴うのではないかという提起、とても明晰なご提起をいただいたと思います。ありがとうござ

いました。本当はここで質疑応答をしておければと思うんですが、最後の方にまとめていただくということにしたいと思います。

続いては、真島一郎さんにご提起をいただきます。本学で社会人類学を教えていらっしゃいます。では、真島先生よろしくお願いします。

報告２　真島一郎

真島と申します。今日のシンポジウムの冒頭で、友常さんが井上さんと崎山さんが共著で書かれたこの著作のことを衝撃的なと形容されていましたが、私にとってももちろん極めて衝撃的な内容だったんですが、問題なのは、今日ご発言される予定の方々に比べて私が段違いにマルクス読みとしては素人で、衝撃的という内容が、どこまで、どの読者層に対してどの程度衝撃的なのかということがあまり量れない。したがってほぼすべてが私にとっては衝撃的だったんですけれども、今日のお話は、この著書にも書かれていたと思いますけれども、お二方が『資本論』の初版の重要性に気がつかれたのが30年ほど前のことになると。だとすると、それだけ長期に渡って厳密にテクスト批判を重ねられた成果なのですから、この著作で示されているマルクス読解の内容を、とにかく、正確にというか誠実に読んで受け取って……特に、個別の論点がどの点とつながっていて、論述の骨組みを形作っているのかといった点に読みの重点を置きました。それなりに時間をかけたつもりです。素人がこの本を衝撃的に受け取るとすれば、それはどういうことなのかということを、私を実験台として、一つの事例として今日いらっしゃった皆様には量っていただければと思います。したがって、コメントというよりは、私が学んだことをまとめた内容の発言になります。私の読解が拙かったり、勘違いしていたりという部分を、あとで著者のお二方にチェックしていただくというとても贅沢な機会をいただきます。

そこで、どのような方がお見えになるのかをつかめなかったこともあるので、少し長めの補足資料を用意いたしまして、適宜省略しながら進めようと思います。私の配布資料はA4の一枚紙、これが話の流れになりますが、あと昨日作ってきた補足の引用で、すべてこのマルクスと商品語からの引用となっています。下線中略部分は、私が手をいれたもので、特に中略部分はいささか乱暴に略した部分があるかもしれません。その点はご容赦いただければと思います。末尾の括弧内が引用頁ということで、見ていただきますと、思想に限らず歴史研究一般にとってもそうだと思うんですけれども、非常に細かく内容を精査して、ある出来事とかある事件とか、あるいはある思想とか、それはいったい現在のなんのためにある、なんのために論述があるのかということは、極めて重要なことだと思います。その点で言いますと、なぜここまで、紙背に徹するという形容を、私はおおげさということではなく、まさにそのような迫力をもってこの本を読ませていただいたんですけれども、なぜそこまでして、どんなメッセージを届けられようとしたのかということを、私は一人の読み手として、一つのロジックとして確かに受け止めたように思っています。

それは、資本が暴走するというような言い方が一般にされるときの、資本がというようなことでなければ、それをもう少し詳しく言うと、暴走の主体はいったいなんなのか。それを正確に特定することが必要になってくると。その際に、補足引用の方を見ていただきたいんですけれども、

この著作では、先ほど浅川さんが少し言及されましたけれども、今日の、著者が「架空資本」と総称している資本の運動が言及されている一方で、その資本というのは、商品―貨幣―資本という三つの形態への相互転化を遂げつつ運動する商品こそが、まぎれもなく主体である、暴走する主体であると。で、主体は商品であるという風にまとめられることもできるし、観点を変えると、03の引用にありますように、一つのプロセスの主体は価値ということもできるかもしれないと。しかしながら、運動する資本というのは価値の運動であるけれども、その場合も資本はあくまで商品なのであると。というようなかたちでの商品批判にマルクスの『資本論』初版の冒頭商品論の読みが懸けられていると。そのためにこそ、非常に厳密なテクスト批判がこの本で展開されるわけですけれども、それが05以降にある、価値という概念の浮かび上がらせ方です。資本主義的生産様式が支配する社会では、価値は商品価値以外にない。しかも、商品価値は徹底して転倒したものであることがマルクスの念頭にある。だから、商品価値に対する批判というのが、価値という概念そのものに対するラディカルな批判になる。しかも、新たな価値を創造する運動への一条件にもなる。私は注記のなかの文章も本文のなかの文章も区別なく引用していますけども、この本の特徴として、極めて重要な論点というのは、一回きり紹介されるだけではなくて何回も繰り返し紹介されています。したがって私が今日原理的にここで引用させてもらった部分というのは、そのなかのわずか一部であって、他のもっと重要な部分でも長く記述があるということはお知りおきください。そして、その価値ということですけれども、商品はなぜ貨幣であるのか、すべての商品に貨幣存在が内包されるということを明らかにするというマルクスの問いを、今だからこそ前景化させ復権させることというのが、単なる過去の思想史のテクスト・クリティークではなくて、それが、あるいは利子生み資本にまでいたるような、すべての相互転化のプロセスを、根源的に批判する契機になるという、そういうメッセージとして私は受け取りました。そのことが、08の引用にも書かれています。利子生み資本、ないしは架空資本という存在の端緒というのが、単純な価値形態においてもはっきりと現れ出ていると。これはマルクス自身の、単純な価値形態において、すべての謎が秘められているというようなマルクスの言葉もこの著作では引用されていたと思います。

二ページ目にいきまして、その価値という概念を厳密に考えるときに、マルクスの独創性は、「価値」と「価値形態」をわけたことであると。ここら辺が、私は、そんなことも知らなかったんですかという風に言われたら恥ずかしいなと思いながら読んでいたわけです。つまり価値と価値形態がまったく別物であるということがある程度プロのマルクス読みの人たちだったらば、常識の一つとしてわかっていることだと。それでこっそり勉強しておこうと思って読んだんですけれども、それは必ずしもそうではなかったということなんだと思います。つまり、価値形態というのは交換価値という風に言い換えられるものであって、その交換価値と価値それ自体というのはまったく違う。価値というのは09にありますように、感性的には捉えられない、極度に抽象的で純粋に社会的な存在であると。極限的に抽象的な社会存在であると。しかもそのことを明らかにするためのメカニズムとして、10のような記述が著者によってなされます。人々は労働生産物を商品として等置し、等置する、としての対象が、三重に重なっているところがこの記述のミソであって、これはそれだ

け幾重にも等置される対象というものが重なっている限りは、なかなか分節化された、言語のアーティキュレーションのなかでは表現しきれないものであると。したがって11の記述がでてくることになります。この記述は非常に重要だと思いますので、目で追っていただければと存じます。「異種の二商品の等置が、交換価値におけるものでもなく、また労働生産物という属性におけるものでもなく、価値という純粋に社会的で極限的に抽象的なものにおけるものであることを理解することはとても難しい」。こういう部分を読んで私は、恥ずかしくなかったんだという気持ちになったわけです。「かのエンゲルスでさえ、少なくとも『資本論』初版刊行時ではその点をきちんと理解してはいなかった」。「ほぼすべての人は、交換価値あるいは価格が等しいもの同士の等置」として異なる二商品の等置を考えるであろう。では、その場合の「交換価値とは一体何か、という問いに至ることは普通はない」。しかしマルクスは、その先に踏みこんで、労働価値説などとは違う価値を見出す。これは本当に画期的なことであったのだと。

そこで、商品論のなかの諸概念をはっきりと弁別していく作業が始まるわけです。これは頁がまったく前後していますけれども、私が私なりにつくりあげ編集したストーリーであることはご容赦ください。つまり、価値それ自体と価値実体にあたる抽象的人間労働と、価値形態にあたる交換価値というのを、人間的な言語によって分析的に定立しながら考えなければ、大変なことになってしまう。思わぬ誤謬につながっていく。そもそも、価値というのは躓きの石なのであるという非常に印象的な言葉がこの著作の中にはあります。しかも、マルクスの記述をそのまま受け止めてそれが正しいとみなすわけではなくて、マルクス自身のいわば行き届かなかった点を、もう一回二人の著者が考え直すというようなかたちで、問いただすとともに修正していく作業が、テクスト・クリティークとともに始まります。例えば、ドイツ語初版から二版への移行においては、マルクスのなかで実際論理の後退が起きてしまっていると。例えば貨幣という言葉をある部分から持ち出してしまうと、価値概念についての議論が台無しになってしまう。段階論として理解されかねなくなってしまう。そうしたことをすべてもう一回マルクスの初版の精神にもとづいて考え直していくと、16にいきますけれども、なぜマルクスが第二版への書き換えをしなければならないのかを考えた部分についての記述ですが、「価値はあくまで交換価値の「背後に」」――非常に抽象的な存在として――「隠れている」」んだと。だとすると、その下の下線部にありますけれども、仮言的にでは、仮言的というのは英語に直せばimplicitに当たると思うんですけれども、implicitな次元においてであっても、価値というものをあらかじめ措定してしまうと、手繰り寄せるべき現実の深奥を逆に隠してしまうことになりかねない。その点にこそ、マルクスの論述の難しさがあったんだけれども、しかしマルクスはこの書き換えを完遂できなかったんだということを著者は結論付けているんですね。もう一つ重要なのが、先ほど浅川さんのレジュメのなかにも非常に専門的なかたちであったと思うんですけれども、価値と価値実体を分けなければならないという議論です。それはどうしてかというと、17の引用にあるように、等置関係を表す等式が、何における等式であるのかということと、その等式が成り立つ物的な根拠は何かということは明確に区分して問わなければならない。その点、価値というのはそれじたい量的なモメントが内在しない存在であるから、物的な根拠が必要になる。その際に、問題の二つの商品が、それにおいて

還元されるところの「第三のもの」と、その二つの商品が等置されるときに「共通なもの」というのが、これまでほとんどのマルクス読みにおいては誤読されてきたのだと。21の末尾のあたりがそのことを明記してある部分です。そうすると、「共通のもの」と「第三のもの」、つまり価値と価値実体を混同してしまうと、22にありますように、「共通な(の)第三者」といったようなマルクスがまったく使用していないような用語を平然と用いながら論じてしまうことになる。しかし、「共通な第三者」という概念は、そもそも論理的に問題があると。つまり、あくまで「第三者」という以上、それは「共通なもの」ではないだろうという、非常に説得的な記述がなされています。それから、「実体」という概念を、ある時期までのマルクスはヘーゲル批判のなかで、実体概念を批判してきたんだけれども、その数十年後、『資本論』の記述に際しては実体というのを価値実体の概念として記述のなかに取り込んでいると。それは一体なぜなのかということで、これは、著者が批判している「価値＝関係」説の人たちが……実体概念と関係概念というと、構築的な議論のなかではたいていの場合は関係概念になるだろうという話があるけれども、私が受け取ったかぎりでの理解では、関係論の構図だけで突き進めていくと歯止めがきかなくなる。その点では、ある次元で実体を措定しなければ、その価値という概念自体が宙吊りになってしまうということの歯止めなのかなと思いました。

あと問題が、商品語という著者のタイトルになっている非常に重要な概念が出されているのが、実はこの本の最大の軸になっていたんですけれども、冒頭商品論のなかに、実は人間は登場人物として存在しないんだということを著者は非常に強調します。冒頭商品論における諸商品の等置関係を、人間同士の交換のような感じで考えてはいけないと。それは人間が介在しない、単なる商品間の等置関係なんだと。そこに商品所有者なり交換の当事主体なりを措定すると、とてつもなく間違った議論に商品論は持っていかれてしまう。だとすると、人間の言語によって先ほど三重の意味で等置関係が置かれるといったような、非常に複雑な商品語の〈場〉とわたり合う覚悟が必要となってくると。その意味で、冒頭商品論の出だし部分と価値形態論以後の部分を、お二方は明確に切り分けて、第二版の目次で言うと、最初の二節は人間語による論理的分析である。それに対して第三節以降は商品語の〈場〉を相手としているということを、明確に意識しないといけないということが、この本の最大のメッセージの一つだと思います。その点、商品語というのは、商品が話す言語である以上、それを単なるメタファーとして捉える捉え方がこれまで非常にしばしばあったけれども、それは間違っている。その記述が、引用部分で言うと29と30のところですね。むしろ商品語の〈場〉というのを考えると、「構造的に創発された無数の力が行き交う＝関係する〈とき・ところ〉であり、物理学のそれと同様に受け取ってよい」ような、そういうある種の空間性を秘めた〈場〉になっているということで、例えば、物理学のそれというのが32の引用で細かく記述されていますけど、私がこれを読んでいてハッと思ったのは、この本の装画を担当された春日井さんという方のデザインのこの模様というのが、商品語の〈場〉をあらわしているのかと私は読んでいて想像してしまったんですけれども……で、商品語の〈場〉のなかには、33ですけれども、アーティキュレーションや可算性というものを考えてはいけない。だとすると、それは言語化不可能な場のことなのかなという風な気もしてきますけれども、34以降で、この本の中でも何回も引用され

ている非常に印象的な部分ですけれども、マルクス自身による「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」という商品語の〈場〉。これは直線的なプロセスではなかなか辿り切れない、価値形態論の非常に重層的な等置関係を、あえて人間語であらわすとするとどうなるのか。それから、商品語の〈場〉じたいの翻訳として、考えるとどうなるのか、というようなことを書かれているわけですね。私が商品語の〈場〉というそれ自体が衝撃的なイメージを前面に押し出してくるような著作に圧倒されていたんですけれども、だとすると、先ほど何のためにこれほど厳密なテクスト・クリティークをお二方は重ねてこられたのかというその片鱗が、38以降の三つの引用のなかに、控えめなかたちではあれ、お二方は表現されているような気がします。つまり、38を読みますと、「商品語の〈場〉によって人間語の世界が、包囲され浸食され包摂され食い破られ断片化され、言葉としての〈力〉を殺がれ、……いたるところで無効化されている現実を止揚する条件、すなわち、人間語の世界をラディカルな(＝根源的な)批判力をもったものとして、まったく新しく創り出す条件を根源から探ること〔…〕それを一言でいえば、文字通り人間そのものを、全面的に「取り戻す」、すなわち創出することである」。このことを、私は、この著作の最終的なのメッセージの一つだという風に受け止めました。39も同じです。「この類的存在としての人間が[…]まったく新たな類としての有り様を創造しうるものである」という強烈なメッセージですね。それから、そういった言葉を考えますと、商品語の〈場〉というのは、人間語によって営まれる社会とは別にある、しかしながらそれはあくまでも価値という概念によって転倒された、その限りで生み出された一種の外であるとすると、その商品語の世界で、中心的な軸となっている価値という概念、それ自体がもっている極限的な抽象性というものが、その外を存在の位置づけとして支えているのかどうかということが、素朴な質問として浮かび上がってきます。

それと同時に、40の引用の中で、井上さんと崎山さんが、現在の状況、社会の富というのは、商品の集積から架空資本の集積に、そして最後に架空資本と同列ですけれども、負債の集積に転化するまでに至っていると。「〈いま・ここ〉において、ひたすら負債を作り出し積み上げ、それによって〈未来〉を喰らい尽くそうとしているのである」というときに、私が考えるもう一つの外というのは、先ほど浅川さんがヘーゲルについてお話をされて、そのなかの「真無限」のところで、「〈他なるもの〉の他者性を否定して自己として受け取ること」という表現がありましたけれども、そういう意味での否定がやがて限界を迎えた時に、つまり空間的な次元で限界を迎えた時に、その否定性の運動がどこに向かうのかと。フロンティアがなくなったあと空転していくという考え方をする人もいると思います。空転しながらカタストロフィーに向かうという考え方ですね。そのカタストロフィーの一つというのが、時間という軸に非常に転倒したフロンティアを見つけ出していく。しかしそれはあくまで転倒しているという意味での外である。だとすれば、いろいろな次元で考えられる外に対して、先ほどご紹介させていただいた38、9のようなかたちで私たち自身がこのロジックを踏まえてどうやったらその先に行けるのかということを考えた時に、その外が持っている一つの重みというものを、単なるイリュージョンとしては考えないで、人間自体が存在者の次元から、いわゆる善悪の彼岸の次元での話にはなりますけれども、存在そのものについて考え始めることが、これほど抽象的なかたちで転倒された外に対峙する場合の一つのやり方なので

はないか。

こういう風に考えたすえに、ファム・コン・ティエンの、一九四一年生まれのベトナムの詩人・思想家でもうお亡くなりになっていますけれども、その詩人が、思想家がベトナム戦争の渦中にあって発表された『深淵の沈黙』という、最近大学の尊敬する同僚が翻訳されましたけれども、そのなかで、こういうようなことをティエンは言っています。ベトナム戦争に対する思想闘争の本なんですけれども、「西洋の現体」――現体というのは、現前と言い換えてもらってもいいかもしれません――「は、ベトナムの現体、とりわけ二〇世紀後半の現体に密着している」。つまりこれは、別のところでティエンが言うんですけれども、ハイデガー思想に触発されながら彼は、西洋の形而上学というのはベトナム戦争において成就したんだと。それに対して、来るべきベトナム思想によって、それを乗り越えようとしたのがこの著作なんですけれども、「一切の哲理は〈淵黙〉へと」――つまり深淵の沈黙へと、深みの沈黙へと――「回帰しなければならない」。これは、ティエンの思想の中では分節のない、言語が解体したあとの世界です。そこにいったん回帰したあとで、人間の言語ははじめて、ある叫び声をあげる。その叫び声というのは、その叫び声が響いたその世界というのは、深淵の沈黙が始まる以前の世界とは一見すると何の変哲もない世界なんだけれども、そこでは根本的に、いったん言語的な分節の領域を超えたあとで、響き渡る声というのはまったくちがうものになるだろうというようなことで、この「深淵の沈黙」というのがある意味では禅の世界、ある意味ではベトナム戦争の地獄に、つまり善悪の彼岸で考えられていたわけです。叫びというのは人間語の世界の言葉ではないように聞こえるかもしれませんけれども、私は38、39のメッセージで井上さんと崎山さんが言われている言葉というのが叫びにあたるのかなと、少し考え始めているところです。これは少し余計なことかもしれないですけれども、冒頭で申し上げたように、非常に重要なマルクスの論点を井上さんと崎山さんはこの500頁以上の本の中で複数の論点を何度も繰り返し読み手が迷子にならないように提出されていますけれども、読んでる側から受け取ると、その反復の力というのが一種のマジカルな感じで……叫びに近い感じに聞こえてくるんですね。テクスト的に言えば非常に厳密なんですけれども。そういう風なところで、最後は余計な話ですけれども、率直な読後感としてそういったことを感じた次第です。ひらいたことになるのかわからないのですけれども、以上です。

司会　真島さん、ありがとうございました。価値に関するこの本の議論をたどりなおすという作業を示していただきました。さらに、ファム・コン・ティエンを最後に持ってくるということで、商品語という、マルクスがそれ以外の方法では表現できなかった商品の転化のありかた、あるいは価値形態のあり方ということを、さらにそれを進めて、ベトナム戦争を介しながら、地政学的な存在というまさしく好ましいありようのなかで商品語を超えていく可能性というものを論じていただきました。浅川さんに続いて、良き読み手というのはこういうものなのだろうと思ってお聞きしていました。

あまり考えずに順番を組んだのですが、真島さんの提起がそのまま大橋さんの提起に見事につながっていくのではないかと、司会としては少しホッとしております。それでは、続いて大橋さ

んにお願いをいたします。

報告３　大橋完太郎

大橋でございます、宜しくお願いします。非常に、貴重すぎる機会にお招きいただき、ひたすら恐縮しております。どうぞ宜しくお願いします。先ほど、真島先生が「マルクス読みのど素人」とおっしゃいましたけれども、「ど素人」を超える形容詞が思いつかなくてですね、「ど素人」をさらにアップグレードすると何になるのかという、「どど素人」ぐらいの感じなんですけれども……。
ぼくが1973年生まれで、学生運動はだいぶ下火になってきている時代で、マルクスを読むっていうよりはもう少しべつの新しいと言われるものを〔…〕向いていって、それでもベースとしては「価値形態論だけは読んでおけ」ということが大学のなかで遺言のように響き渡っていました。それで、読んでみたのですが、20年以上前ですが、さっぱり分からないまま20年近く、時が悲しく経ってしまいました。今回、友常さんから機会を与えていただいて、それなりに個人的にはがんばって噛みついてみたんですけども、その理解をみなさんに伝えられるかどうかは別として、自分のなかでは理解が深まりました。これが、15～20年前に――お二人の著者の研究歴はそれ以上かと思うんですけれども――出ていれば、20歳のときの自分が色んな文庫本を放り投げる必要も無かったのになあ、というようなことを、読み終わったあとに感じました。

それで、配布物はA3が3枚。真島先生のご報告と結果的になんとなくつながりつつ、少し違う感じになっているんじゃないかと思います。冒頭のところは大まかな見取り図です。本書の表題にもある「商品語　Waarensprache」という概念は、本書によれば『資本論』第2版第１章第３節に登場すると指摘されている。本書の企図のひとつは、「真正面から取り組」(21)まれることがなかったこの概念を、単なる比喩ではないものとして理解し、その内実において、『資本論』の根本をなす概念装置として捉える点にある。その意味で、この概念は、本書におけるマルクス読解において、単なる比喩ではないものとしての理論的負荷を持つ。理論的装置というわけですね。それゆえ、本書の意義を理解するた　めにも、当概念にどれだけの理論的負荷がかかっているのかを理解する必要があると考えました。今回の報告では、本書において展開された「商品語」および「商品語の〈場〉」に　関する著者の理解を追跡し、その理論的視座の意義について、少し現代の理論と比較参照することによって確認したい、というものです。

申し遅れましたが、もともと専門は18世紀のフランス思想、ディドロという人の研究で、『ドイツイデオロギー』なんかで初期弁証法的唯物論の二人のなかでルソーとディドロとか挙げられているんですけど、結果的にまったくもってつながりを見せないままやってるんですが……。少し最近は、フランスの現代思想のあとに来ている、もう少し新しい実在論とか唯物論のほうにまで展開して考えているので、今回はその後者の方との関係で少し、気づいたことをお伝えできればなと思っています。

それで、これは真島さんが引用してくださったので敢えて言う必要も無いと思うんですが、一応それでも大事だと思ったので、とりあえず引用を読みます。

> 商品価値の分析がわれわれに語った[sage]一切のことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語る[sagt]のである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉[Sprache] で、商品語[Waarensprache]でその思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的属性においてリ ンエル自身の価値を形成するということを言う[sagen]ために、リンネルは、上着がリンネルに等しい ものとして通用するかぎり、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っ ていると言う[sagt]。リンネルの高尚な価値対象性は糊でごわごわしたリンネルの肉体とは違っていると言う[sagen]ために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う[sagt]。ついでに言えば、商品語[Waarensprasche]も、ヘブライ語のほかに、さらに多少なりとも正確な多くの方言[Mundarten]をもっている。たとえば、ドイツ語のWerthseinは、ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir に比べると、商品Bの商品Aとの等置が商品A自身の価値表現であることを言い表すにはさほど適切ではない。Paris vaut bien une messe!

最後のフランス語はアンリ4世の言葉で、たしかプロテスタントからカトリックに改宗せざるを得なくなったときに、多少の犠牲は払ってでも、とりあえずミサを開いた方が良いというような発言で、嫌々ながら政治的に改宗したという犠牲がつきものだという定型句らしいです。
これが一番重要だと思われるとこで、先ほど真島さんからもありましたけれども、こうしたことがいくつか繰り返し変奏されます。たとえば24頁では、「かくして諸商品は、自分たちがどれほどの価値であるかを、自分たちのさまざまな貨幣名でぺちゃくちゃ口にし、そして貨幣は、ある物象を価値として固定する、つまりは貨幣形態において固定することが必要な時には、いつでも計算貨 幣として役立つのである」ということが書かれています。こういう風に商品が語ると言われて、じゃあこれが人間語とどう違うのかということですが、人間語はこうだと言われています。

> 人間語の世界は対象世界(――自然・社会)に向かって〈口〉を開き、それによって対象世界の非加算無限性を呼吸するものである。そのことを、人間の論理がもつ〈開かれ〉は表現しているのである。

これとは商品語の世界が異なると言われているわけですね。これとは異なるためには、まず商品といったものが自立して喋る主体である必要があるということを言っておられる。

> 商品はヘーゲルに倣って言えば理念としての存在、すなわち、概念と実在との統一であって、過程の中で、主体として自ら「判断し推論する」ものである。そうである以上、商品が自ら「言語」をもち、商品相互の「意思疎通」をはかっていると考えることは、荒唐無稽ではなくむしろ自然である。商品が、過程の中で構成し成就する諸事象が、ある「言語」――商品語――によってなされると考えることは自然である。だがもちろん、その「言語」＝商品語は、あくま

で人間語とは決定的に違っている。

(25頁)

違っているということは、こういう風に繰り返し言われています。じゃあ違っている商品語というのはどういうものなんだということで、考察が進んでいきます。ただこの、どういうものなんだというときに人間語を介すると必然的に誤解が生じ、マルクス自身も相当な回り道を強いられるということなので、そこのところでどういうふうな枠組みになっているかということを考えると、第4章第3節で商品語を成立させる価値形態論の枠組みとして集合論が導入されます。今回ここに少し注目してみました。

というのも、あとの部分で著者の方が言っておられるんですが、集合論自体はマルクスの時代にはこういう形で成立していなかったわけです。ですが、この集合論を導入することによって価値形態論および商品集合の関係性が見て取れるということがあるわけです。そうなりますとですね、ようやくマルクスの商品語あるいは価値形態論を読み解く道具立てが、だいぶ後になって整理されてきたんではないか、その一個の道具立てが集合論であるということは非常に重要だと思います。これは後で、なぜかということお伝えします。

それで、集合論の導入に入りますけれども、本書では「集合W」といったものが想定されています。「集合W」とは何かというと、141頁にあるように「その社会における一定の時期の商品全体の集合」として考えられています。ここで先のお二人のご発表者の方と少し論点がかぶると思うのですが、ここで「利子生み資本、金融デリヴァティヴなどは、労働生産物ではないので集合の要素にならない」(143頁)というふうに定義されています。そうすると、ある種の市場(market)といったものは、たとえば金融デリヴァティヴとか為替などあるわけですが、そうした市場そのもの、様々な市場があるなかでmarketというものは一般的なものとして考えられるのか、それとも違うのかということが、まったく事情を知らないなりに疑問として浮かびました。つまらない質問かもしれませんので、そこらあたりはあとでご教授いただければありがたいのですけれども……。

とにかく、こうした「集合Wは、労働生産の結果として形成されたものである」から「ここから逆算的に価値形態論のあり方を考えることができる」(144頁)だろうというのが、この商品語のプロジェクトのところの問いかけです。

それから、あとのところは集合の三つの形態といったことが言われているのですが、ここにおいてですね、イコール(=)で様々なものが結ばれます。それで、ここのところの含意がまだ完全に読み解けてはいないのですが、これはイコール(=)で結ばれつつイコール(=)ではないということが一つのポイントであります。というのも、等号で結ばれた左項は「相対的価値形態」であり右項は「等価形態」であるということが言われている――左項(相対的価値形態)=右項(等価形態)――。つまり、a=bとb=aは異なる意味を持ちうるんだということが前提とされていて、ここのところで非常に〔…〕された議論がされているのですが、さしあたりはそのぐらいの次第に整えておいて、こうした集合論の意義というのを考えます。

ともあれ、こうした形で表される「商品語の〈場〉は、人間語の世界のような線形時空をなしては

いないのである」(148頁)。人間の言語といったものが、ある仕方で単語を行に沿って並べるとか、論理を段階的に並べるということによって線的な秩序を持つんだけれども、商品語の世界はそうではない。じゃあどういう世界かというわけです。次の引用は同じことで、分節化がないという真島さんのお話もありました。

> さらに言えば、商品語の〈場〉においては、分節化が行われない。[…]価値関係という関係そのものが一挙に多くのことを語るということは、いわば無時間的に、あるいは多層的な時間が凝縮された系にそなわる〈理論的な一瞬〉において、商品語が溢れかえるわけである。
>
> (149頁)

言い換えると、「無時間的もしくは多層時間的に、相対的価値形態にある諸商品が自分にだけ通じる言葉を一斉にしゃべる」(149頁)、あるいはしゃべり合う、というのでしょうか。この空間と言語といったものをイメージすると、先ほど真島さんが本書の表紙のイメージに近いんじゃないかとおっしゃられて、あぁそうだったか！と思って理解すると同時に悔しい思いをしたのですけれど……様々なものがエネルギーでありつつ要素でありながらお互いに干渉しあい、あるときはエネルギーでありながらあるときは固体化するっていうような、この奇妙なビジョンを、どういう風に言語で、しかも整然とした経済学者に通じるような言語で、語るのかということが、おそらくマルクスおよび本書が努力して相当程度成し遂げたことなのではないかと思う訳です。これを、商品語の人間言語的翻訳は「廻り道」にならざるをえないとマルクスは言うわけですし、この本自体が「廻り道」というか、何度も何度も同じ説明を繰り返し多方向からすることによって、なんとかこうした構造を浮き彫りにしようとしたんではないかというふうに、私は読みました。

さてここでですね、商品といったものが自立的にどういうふうに価値を持っていくかというときに、人間的言語と商品語のあいだとの齟齬みたいなものをどう考えるかという点で引用してみたいところがあります。

> 商品は、自分が価値であることを直接に、つまり自分だけで示すことはできない。まず、能動的に他の異種商品を自分に等値することが必要である。その媒介関係を通して、つまりその媒介関係の結果として、自らの価値が表現される。こうして、当該の商品が、現実的に商品であることが示される。能動が媒介を経て、受動に変わる。
>
> (150頁)

人間言語的にはこう説明せざるを得ない。ただ、これ自体はどうなのかということを伺ってみたいのですが、能動から媒介を経て受動に至る時間性といったものはどういうものなのかということです。ある瞬間A(n)に能動であったものが、次の瞬間A(n+1)に媒介となり、その次の瞬間A((n+1)+1)に受動となるということで理解できるのか。これは人間的言語の秩序に則った理解なのですが、それとも能動から媒介を経た受動ていうのが、「理論的な一瞬」ということがありまし

たけども、ここにおいて瞬間Aということで捉えた方がいいのか、というところで非常にこう、このあたりのメカニズムを伺ってみたいなという風に考えました。

この本は、ここからさらに面白く展開していくのですが、すいません力尽きましたというか、これ以上まとめることができなかったということで、次に進みます。先ほど真島さんもおっしゃられた、リンネルは「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」という、きわめて魅力的なフレーズをどう解釈するのかといったときに、普通に考えたらリンネルが蠅を叩くわけは無いんですから、なんなのかというわけです。

> リンネルを人間労働のたんに物的な[dinglich]表現として把握するためには、それを現実に物[Ding]としているところのすべてのものを無視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、一つの想出物[Gedankending]である。こうして亜麻織物は頭脳織物[das Flaschsgewebe zum Hirngespinnst]となる。
>
> (154頁)

この「頭脳織物」といったものが、非常に、めちゃめちゃ面白いと思ったんですが、これ以上掘り下げられなかったので、ここからおそらくですね、たとえば2009年に京大の人文研からフェティシズム論というのが3冊本で出ていて人類学とか精神分析が多いんですが、その冒頭の議論のなかでマルクスの商品フェティシズムについて書かれています。そこでこの「頭脳織物」というところが商品フェティシズムのところの前に概念として出されているんですけれども、残念ながらこの論集のなかにマルクス論がない。このフェティシズム論というのは、たとえばフランスでいうとブルーノ・ラトゥールみたいな人が近代のフェティシズムという仕方で、ある科学的なものの相対性というものを示すために持ってくる概念なわけで、いま注目されている概念のひとつなのですが、このマルクスのフェティシズム論といったものを、ひょっとしてこの「頭脳織物」の読解から、新しい人類学と経済学と哲学みたいなものが合わさった潮流のなかに組みこめるんじゃないかと思って、紹介がてらお伝えしておきました。

最後に現代哲学から見た「商品語」概念といったものを少し考えてみるということで、「商品語」の「場」という概念で考えてみたと。それでおそらく想定されているのは「場の量子論」になろうというわけなんですが……。色々考えたんですが、みなさんにすでに資料として配られた著者のお二人の論文がありますよね、「『資本論』冒頭商品論の、出だし部分と価値形態論における諸商品の等置式の直接対比的考察」。考えていたことが、こちらを読んだら解消されてしまったので、こちらを紹介します。該当の箇所は論文の注５にあたるところですが、素粒子論でボースとフェルミのふたつの粒子をつかった説明されているのですが、問題になるのは本文で「あれこれの電子を区別する固有性は一切ない」と言われているところです。こうした部分に対する注を引用してみます。

以上見てきたところから解るが、「幽霊のような対象性」なる規定が、等置された異種の二商品から使用価値を捨象した二つの労働生産物（商品）に対するものであることをすら、把握できている論者がほとんどいないのである。さらに、「幽霊のような対象性」しかもたない二つのものが、まったく区別のつかないものであることを精確に捉えている論者は、当然ながら皆無である。「幽霊のような対象性」が、等置された二つのものに対する規定であることは、論理を精確に突き詰めさえすれば、把握することは可能である。しかし、それら二つのものが固有性を完全に喪失してまったく区別のつかないものと化していることを理解することは、たんに論理的に詰めていくだけではなかなか到達できないことだと言うしかない。使用価値を捨象した後も、二つの商品はそれぞれ何らかの固有の属性を保持し存続しつづけているものとして、すべての論者が捉えているのである。

「幽霊のような対象性」といった言葉にかかわる従来までのすべての誤謬が、この量子論的な解釈において解消するっていうのが、この『マルクスと商品語』およびそこから派生してくる学問的成果のひとつの成果なのではないかと思い紹介させていただきます。すなわち、「幽霊のような対象性」しか持たない二つのものは、まったく区別がつかないものであると。区別はつかないが、二つあるということは言える、ということですよね。ここのところがどういう仕組みなのかというのが次の内容になります。

ここに、素粒子の例が比喩として意義をもつのである。

素粒子は、自然界の確固たる実在であるが、その在り様は、日常世界・日常意識からは捉えることのできない異様さにみちている。たんに、思惟作用の一つとして、ある何らかの約束事として条件的に、区別がないものだ、とするというのでは決してない。それは、思惟が仮定的に措いた諸条件とはまったく無関係に、つまり、思惟を超えた存在の根源において、区別のないものとして存在しているのである。量子力学が対象とする実在は、基本的に波動関数を用いて表現される。この波動関数は、実数を変数とする実関数ではなく、複素数を変数とする関数である。また、さまざまな形で無限が数式表現に関係する。こうした対象を、日常的意識とその延長で了解することはほとんど不可能である。そういう了解不可能性の一つが、〈無区別性〉なのである。日常意識は、実空間における、しかも何らかの形で有限世界に限定された事柄・事物としてしか、実在を理解することができないからである。

労働生産物が、物象である商品として存在するかぎり、素粒子と同様の区別の喪失が現実に生じているのである。商品同士の等置がその現実を示している。しかし、商品は使用価値でもある。この現物形態に目を奪われる限り――そしてそれはほとんど回避できない――、商品が物象として、まったく何の区別もないものとなっていることは、ほぼ理解不能である。かすかに、素粒子の喩が、この理解困難性を突破する糸口を与えるということなのである。

マルクスのいう「幽霊のような対象性」という異様な規定は、ことほど左様に、理解するのが困難なものである。しかし、この点を精確に理解することが、商品を、たんなる物（Ding）

ではなく、物象(Sache)だと捉えることなのである。

ここのところで、場の量子論の根本的な構図と一致するであろうと、さらにそれを精神に展開するのがフェルミ粒子のところであろうと思っています。エネルギーがある仕方で粒子化するときがある、そこにおいて瞬間的にそれは局在可能なものとなる、それが実体化とは言いづらい何かなんですが……。それは個体化なのか個別化なのか分からない仕方でカウンタブル(countable)な点になっているわけですよね。商品といったものは、商品語の場における商品といったものは、おそらくそうした商品語のざわめきのなかでバッと集中して現れるような何か、型のような何かなのかなというイメージでとりあえず捉えました。これが、まだ人間語の翻訳としてつたないので、もう少し、せっかくの機会なので著者の方お二人に、非常に豊かな着想を与えるイメージなので、理論的にどういう風にさらに考えるのかということを伺ってみたいところがあるのですが……。さしあたり、こうした物自体、あるいは物とも言えない何かが要素として溢れかえっているなかから、どういうふうに関係性をつかみ出していこうかというのが、現代理論の展開としては色々あるっていうものを最終的に提示しておきます。

たとえば、アクター・ネットワーク理論というのがありますね。人と行為とモノっていうもののインターアクションを考えましょうという。これは逆にいうと、商品語の場の世界を人間的な世界に引きずり下ろした仕方で再度翻訳して、少し人間的にするとこのような理論になるのではないかという気がするわけです。

> 私たちの目の前にある事象や出来事は、そもそも生態、社会、文化などに分かれているのではなく、本来、人とモノが媒介しあいながらネットワークとしてつながった一つの全体(移ろいやすいものであるが)であるという、「当たり前」の世界の見方である。
> (足立明「人とモノのネットワーク」『フェティシズム論の系譜と展望』、田中雅一編、京都大学学術出版会、2009 年、181p)

当たり前なんですけども、社会とか文化とか、あるいは歴史とかって考えることで、文字通り思考から外されてきたものが、実は非常に平べったい場のなかで共存しているんだ。で、そこでお互いインターアクトしながらですね、何かモノを作りだしていくんだっていうビジョンですね。こうしたもののなかに、マルクスが商品語というなかで語ろうとしていた、なにか世界観と少し違う展開が見られないかというのがひとつです。

もうひとつが、マルクス「商品語」および「商品語の〈場〉」概念がもつ理論的展望ということで、まず非常に安易な展開として、データ的なものの「堆積」と「共鳴」する空間がありますよね、ということを考えていました。実はわたしたちは、データ一個一個というのは0か1かというものの集積でしかないわけですよね。で、それはそのものとしては、そうとしか読み取れない。なのですが、それがある仕方で集積し共鳴することで、なにかあたかもそれが商品のように結実してしまうバーチャルな空間、それがAmazonていうやつです、たとえば。購買履歴、検索数、購買傾向といったも

のが、いったんデータという非常に判読不可能なレベルに落とされて、それが再集積されて実体化して、「この商品を買った人はあんなものを買っています」……。先ほど真島先生がおっしゃった、未来を先取りして食い荒らすような構図ができてしまっている。こっちが情報化理論のほうによってなされたある種の展開だとすれば、それは先ほどつたなく解説した以上の射程がある素粒子的な理論の射程とは峻別して考えたほうがいいのではないか、おそらく違うであろう――おそらく違うであろうとしか言えないのが現時点で悔しいところです――と思います。逆に言うと、別の仕方ですると、デリヴァティヴであるとか利子生み資本といったものが商品としてみなされないと言ったのですが、情報といったものは現に商品になっていると思うんですね。労働などとの関係でいうと商品なのかないのかというのは明白なんですが、先ほどのデリヴァティヴとか利子生み資本というのに加えて、おそらく情報というのも理論の射程に入らざるを得ないだろうと思います。ただ、それは自分も含めて考えなければならないですし、『マルクスと商品語』を読んで初めて気づかされた仕組みではあります。これは大きな、株や取り引きにもとづく、カンパニーだけがやっているものではなく、コーポレーションガバナンスだけがやっているものではなくて、個人のレベルで私たちに侵入してきているものとして、一番警戒しないといけない何かなんではないかという訳です。

ふたつめが、逆にすこし理論的にさらに展開できそうな、ひとつめは現実的な危機感といったものを個人的に出して、ふたつめは理論的に面白いところいったものを展望として出してみるといったところです。それは、数学的なものの非人称性といったものを、おそらく商品語は場にしているだろうと。集合論における展開というのは、そういうことです。

メイヤスーという人がいまして、『有限性の後で』というものをフランス語から翻訳したんですけれども、世界は根本的に偶然的なものになるという絶望的なテーゼを出した人で、今日東から太陽がのぼるからといって、明日も東からのぼるとは限らないんだとか言っている人何ですけども。現代において、ある科学的な思考が可能なのは、閉じられた全体といったものが存在しているからだというわけです。つまり、ある法則が妥当する、この宇宙とか地球とか〔…〕、ということは科学的言説というものは、非常にかぎられた世界を相手にしている。ところが、世界といったものがそうである可能性はないと、先ほどフェルミが言ったみたいな……。そうなると、世界といったものがいつどうなるか分からない、先ほど出てきた、カタストロフィの可能性を常に携えながら思考していかなければならない。ただそのときに、メイヤスーは、唯一思考として使えるのは、無限的なものさえも扱える数学であると言うわけです。ここのところが、非常に『マルクスと商品語』のある一節ととても響いていてですね……。こちらの『マルクスと商品語』のほうの著者のお二人は、非常にモデストな仕方でですね、148頁なんですけども……。

> 集合の考え方によって整理することが最も適切であると我々は判断した。これによって、マルクスの述べたことを最も簡潔正確に言い表すことができると思われる。ただし、有限集合が対象なので、量の規定性までも集合の考え方で押し通すとかえって混乱が生じる。
>
> （148頁）

というわけなんですが、実はメイヤスーの考え方を展開すると、むしろ集合といったものが有限である必然性というのはない、むしろ無限にまで展開して考えられるというのが集合論の強みであり武器なのである、ということで、はからずも現在のフランスの科学的認識論を超えるような射程を、この『マルクスと商品語』における商品分析が、おそらく展開し応用し、その可能性を出しているんじゃないかと。

ただ、そこで、この商品世界といったものの総体の有限性／無限性といったものについて、少しきちんと考える必要があるんだろうな、ということがあるんです。無限は、具体的な定義でいうと、無限なのか無制限なのか無際限なのか、色々な定義の違いがあるとは思うんですが……。それで「計算も賭けることもできない出来事についての最も強力な思考は、それでもなお数学的であるような思考なのであり、芸術的な思考でもなければ、詩的でも宗教的でもないということである」(『有限性の後で』181頁)というふうなことを、メイヤスーは言っています。この、マルクスの時代からすればアナクロニスムともうつるような集合論を応用し、今まで解かれなかった集合論の世界を読み解くという態度に、もはや著者のお二人が最も合理的なものに対する信頼性といったものが見えてきた気がしましたし、それは自分なりに引き継いで考えていきたいと思っております。すみません、つたない発表で申し訳ございませんでした。以上で終わりたいと思います。

司会　ありがとうございます。もうお腹いっぱいという感じもするんですが、大橋さんからは期待通りの提起をいただきました。私も、どこだったか覚えていませんが、メイヤスーを読んだときに冬休みの一週間くらいつぶれてしまいましたけれども、どこかがたしかに響いたんですね。商品語の議論のような展開は、たぶんメイヤスーのなかにもあるんだろうと思って、大橋さんにお願いしたいと。その大橋さんの提起の最初の問いで、商品語の議論がはらんでいるのは、私の自分の専門分野で言うと日本思想史なんですけれど、朱子学は閉じられた合理的な体系と言われますが、体系というわりには宇宙論なので無限なんですよね。だから、無限なものが非合理な、あるいはカウントできない他者みたいなものと両立するということが朱子学のなかにもあるんではないかということを感じたというのもあって、別の日本思想史の書き方が可能なのかなと思うことがありました。というのは私の感想ですけれども、久留間鮫造と宇野弘蔵の議論なんかが『マルクスと商品語』のなかで参照されていて、商品Aは自分に商品Bを等置すると、これは自分を等置するのではないと力説されている箇所がものすごく印象的な箇所のひとつで、いかに能動－媒介－受動という、大橋さんが言われている部分の、価値形態論は、展開でもなくある意味で転化というのも慎重に使わなければならず、私はゼミ生の前で散々似たようなことを指摘しながらここはこう言っているんだと説明してきましたが、それも多くはきわどい説明をしていて、そういう部分に関する注意を促しつつ、この『マルクスと商品語』の価値と商品語ということに関するとても本質な議論について、ご提起いただいたというふうに思います。こういう風にして私たちはカームダウンしながら行かなきゃいけないんですが、次の中村さんの報告にはいつもそういう役割をお願いしていますが、この『マルクスと商品語』という問題提起の、本当にポレミックな本が、マ

ルクス主義の思想史のなかでどう位置づけられるのかという議論のなかに置かれることになるかと思います。それでは中村さん、宜しくお願いいたします。

報告４　中村勝己

中村勝己です、宜しくお願いします。半年ぐらいで急激に老眼になっていて、レジュメをさっき見てびっくりしんたんですけど、自分の名前を誤変換している。他人様の名前を間違えることってわりとあることだと思うんですけど、自分の名前を間違えているんですよね。それはどうでもいい話なんですが……。

今日、私が報告の役割を仰せつかったのは、やはりイタリアの運動史と思想史を研究しているということで、イタリア・マルクス主義の観点をひとつの補助線にして『マルクスと商品語』を読んでみるという役割であろうと思います。商品語というのは、マルクスの言葉ではWarensprachеですけれども、これを『資本論』イタリア語訳で該当箇所を見てみると、linguaggio delle merciという訳語がついていました。そこで早速、linguaggio delle merciを検索にかけて見てみたら、全然出てこない、ヒットしないんですね。ですから、少なくともマルクス研究のなかで商品語に着目して、そこからグルッとマルクス解釈をひっくり返していくというアプローチは、少なくとも私がちょっと調べてみただけでは見当たらない。世界的にもあるのかどうか分からないですね、本当に驚きました。また、そういう大胆なアプローチを、しかし文献学的に手堅い手法でやっているということにも驚きました。初版の価値形態論、さらには第二版、さらにはフランス語版のロワ訳を込みで見ながら、きわめて手堅い手法でやっておられると。

ちなみに、私自身はどういうアプローチをするのかっていうことなんですが、この『マルクスと商品語』の分類によるとですね、私は実は「スターリン主義」ということになります。うすうす、なんか自分はちょっとひょっとしたらそうなのかなと思ってたんですが、ずばりお前はスターリン主義だよという風に言われてしまったんですね(笑)。113頁にはこうあるわけです――「価値を抽象的人間労働に重ね合わせ、結局は、抽象的人間労働を価値だとする誤読にいたる」。私はまさにこの立場にあります(笑)。しかし、ただしですね、「「労働力の生理学的支出」をもって抽象的人間労働だと主張し、価値を実体化して捉え」(178頁)る立場にはさすがに行っていませんでした。というのは、80年代に私は三里塚であったり山谷であったりの運動にかかわった活動家だったんですけれども、その時には、『資本論』をじかに読むという動機がないというか場所もないということもあって、廣松渉の著作を何冊か拾い読みすることで間に合わせていたという、そういう人間です。しかし、廣松の物象化論あるいは『資本論』の研究書・解説書を読むことを通じてですね、さすがに「労働力の生理学的支出」が何か計量化されることで価値が決まる、という議論には行きたくなかったという感じですかね。しかし、自分自身が80年代に研究者になるとは思ってはいなかったので、そういう意味では廣松の本を何冊か拾い読みして済ませていた。ですから、この『マルクスと商品語』以前に、崎山さんが岩波の「思考のフロンティア」で『資本』という本を出されていますけども、あの本の最後の「あとがき」のところで、自分は学部時代・院生時代にバラキン(榎原均)さんと、さらには井上さんと、『資本論』の読書会をやっていてという話が書かれていて……、私

と崎山さんとは学年で言うと2〜3学年くらいしか違わないんですけれども、しかし、そんなに違うのかと、ちょっと驚いた。つまり、直接マルクスを読むという、そのことが私にとっては驚きでした。

さて、そんな話をしているとキリがないので。私自身がどういう形でマルクス研究というのか、マルクス主義の研究に入ってきたかというと、やはり2008年のリーマンショック以降です。システムとしての資本主義というのがこんなに脆いものなのかということに、直面せざるを得なかった。私はもっと資本主義に対して楽観的というか、新自由主義的な改革ですね、労働市場がベースになって、かつ労働者が自由な選択をできるのであれば、むしろ人間の自由というものを拡大するチャンスなんじゃないかぐらいの感じでみていました。そういう意味で、資本主義に対する認識が甘かったんですけれども、そのことがやはりリーマンショックで、たとえば日比谷の派遣村とかそういう現実を見たときに、自分はもう一回、資本主義の認識を改めないといけない、そのためにもう一回マルクスを読み直そうと思ったわけですね。

その場合に、どういう風にマルクスを再読するのかということで選んだのが、オペライズモだったということになんです。オペライズモというのはイタリア語で、直訳すれば「労働者主義」ということになるんですが「労働者中心主義」ぐらいの意味ですね。またあとでも触れますけど、オペライズモの特徴としては、使えるものはなんでも使うというプラグマティックな姿勢があります。つまりマルクスの著作と言われれば、使えるところを使う。さらには闘争史観というんですかね、階級闘争あるいは人民の闘争こそが歴史を動かす、というその点ははっきりしていて、その二つに私は共感を覚えて、オペライズモを手がかりにしてマルクスを再読するということを、この10年近くでやってきました。しかしなかなか、進まないですね。

しかしまた、オペライズモにはどこか理論と実践の関係がちぐはぐにくっついているような、そういう面もあります。ですから、あとで見るマリオ・トロンティなどがですね、60年代前半から半ばにかけて「労働の拒否」ということを言っていて、具体的な中身はストライキをバンバンするということなんですが、当時イタリア北部の工業都市のトリノなんかでは、労働運動なんて非常に沈滞していてですね、弾圧もあって、とてもじゃないけど「労働の拒否」なんてできるような状況じゃなかったわけなんですけども、しかし60年代末になると、南部から大量に流入してきた青年労働者たちが組合の統制をはねのけて山猫ストを打つと、そういう状況になる。ですからある意味では、トロンティの議論、「労働の拒否」の議論は60年代末のイタリアの熱い秋の状況を理論的に先取りしているんですけど、しかし今から振り返ってみると、ちぐはぐな関係があります。

さて、またイタリアのオペライズモでは、物象化論というか価値形態論の理論的な深化というのは見当たりません。そのあたりですね、この『マルクスと商品語』を読むための補助線として、はたしてオペライズモが使い物になるのかどうかというのが、ちょっと難しい問題にもなります。ただ先ほど言った、使えるものはなんでも使うというプラグマティックな姿勢がオペライスタたちにはあるということで言いますとですね、じゃあ厳密な理論的な出発点というものを措定しないと、正しい理論的結論に至れないのかという、そこの素朴な疑問はやはり『マルクスと商品語』を読ませていただきながら感じた素朴な疑問なんですね。やはり数学が、それこそ集合論になっ

てるということで、厳密な出発点というものを立てて、そこから議論を展開していくということなのかなと私は読んだんですが、むしろオペライスタであれば、出発点はもう極端に言えば何でもいい、間違った出発点でいい、その代わり途中で微修正していって最終的には妥当な理論的な結論に至るんであればそれでいいという、すごく理論に対する弱い規定、理論に対するゆるい規定というのが、オペライスタにはあるように私は感じます。

さて、こんな話をするとどんどん時間がなくなっていくので、早速私のイタリア研究の観点からですね、前史ということで19世紀末の〈マルクス主義の危機〉論争について簡単にお話したいと思います。イタリアでは19世紀末に、アントニオ・ラブリオーラという、もともとナポリ・ヘーゲル派の哲学者だったわけですが、この人がエンゲルスに直接文通をしながらマルクス研究を開始します。そして、ラブリオーラはもともと哲学者だったということもあって、マルクスには哲学がある、それは「実践の哲学、すなわち史的唯物論の延髄」になるんだという言い方をしています。ただ、ラブリオーラはこれ以上の体系的な展開というのはあまりできていなかった。ただし、この実践の哲学として、マルクスには哲学があるんだと、それは実践の哲学なんだとハッキリ言った点で、それに続く弟子たちのマルクス研究を強く触発しました。たとえばベネデット・クローチェ、さらにはラブリオーラと文通していたジョルジュ・ソレルといった人たち。ただ今日はこの2人のことはとりあげません。代わりにとりあげるのは、四人のうちのひとりで最も若かったジョヴァンニ・ジェンティーレ。この人は、『マルクスの哲学』という本を1899年に出していまして、実はレーニンが1915年にロシアで出た『グラナート百科事典』の「カール・マルクス」の項目の文献目録のなかで、ジェンティーレのこの著作を取りあげて、ジェンティーレは注目に値すると言っているんですね。ですから国際的にもかなり反響を呼んだ研究です。

で、どういうことを言っているかというとですね、引用を読み上げます。

> 主体の力によって形成されていくこの対象〔現実〕は、主体の二重化、主体自身の自己投影、主体の自己疎外(Selbstentfremdung)にほかならない。この二重化について批判すること、すなわちそれを承認するということは、主体の二重化が生じたことを意識しているということである。ひいては主体の綜合であり、その結果としての主体の増大である。マルクスは省察している。教育者が教育されなかったということはおよそありえない、と。ここで実践はその本性からして反転する。実践は働きかける。それは対象のうちにみずからを固定し、矛盾のうちに入りこんで、それ自身で総合へと解消される。教育する者、教育される者、教育される教育する者。これが実践の必然的発展である。
>
> (邦訳157-8頁)

これは1899年の論考ですが、当時のジェンティーレは、『経哲草稿』も『ドイツイデオロギー』も『要綱』も発掘されていないという状況で、『共産党宣言』さらにはエンゲルスの『フォイエルバッハ論』のなかからマルクスの『フォイエルバッハテーゼ』、そして『経済学批判』と『資本論』という、本当にごくごくかぎられた著作を使いながら、マルクスには哲学があるんだ、それは実践の哲学だと、

しかも人間の主体ないし社会自体が主体になって実践して、対象にはたらきかけていく。今度は、その対象が、客体の側が人間主体に対して働き返す。この主体と客体との相互主体的な作用に光をあてた研究になっています。つまりジェンティーレの『マルクスの哲学』というのは、ルカーチの『歴史と階級意識』に四半世紀も先駆けて、ヘーゲル＝マルクスの継承関係に着目して、人間と社会の主体としての実践、その疎外および疎外の克服としての革命＝共産主義について論じています。

しかし、疎外(alienazione)論はあっても、そこに物象化(reificazione)論がない。また、〈マルクス主義の危機〉論争のなかでは『資本論』冒頭部分の商品論であったりとか、価値形態論が論点にはなっていませんでした。そして、そうした議論のため、つまり強烈な主体性中心主義的なマルクスの読み、アプローチがですね、当然これはグラムシの『獄中ノート』にも影響を与えた。ですから、グラムシの『獄中ノート』のなかでも、この『資本論』の冒頭商品論、価値形態論の掘り下げというのは見当たりません。

さて第二次大戦後になりますと、イタリアは高度経済成長の軌道に入ります。スターリン批判とハンガリー事件のあとに、新しい潮流が出てきます、それがオペライズモなんですね。このオペライスタたちというのは、たとえばグラムシが1926年の草稿――「南部問題についての覚え書」――のなかで「北部労働者と南部貧農との階級同盟」と言っているわけですが、そうした問題設定それ自体をキャンセルしていきます。極端に言うとイタリアに農民なんかいないんだと、もちろんいるんですけど。だけども、もう重要なファクターではないと。労働者なんだと、労働者がついにイタリア社会にもなったんだと。それで、この人たちの運動をさらに先に勧めることでイタリア革命を起こす、そういう問題意識です。ですから、『資本論』は、マルクスは初版の序言のなかで「主要な例証」はイギリス社会なんだとはっきり書いていますけども、その話でいうなら、19世紀イギリスの状況がやっと20世紀の後半になって高度経済成長によってイタリアにも到来したんだ、そういう問題意識ですね。ですから、「イギリスのレーニン、デトロイトのマルクス」というのが彼らのキャッチフレーズになります。イギリスでレーニンが革命を起こすんだ、アメリカのデトロイト、労働者の街、自動車の街で、マルクスが革命をやるんだ、そういう問題関心があるんですね。ですから、大工場の分析に、どうしても彼らの関心は集中していきます。

まず最初に取り上げるのはラニェーロ・パンツェーリ、社会党員です。イタリア語訳の『資本論』の第2巻の翻訳監修者でもあります。この人は「新資本主義(ネオカピタリズモ)における機械設備の資本制的使用について」という論考で『資本論』の第1部の第4篇「相対的剰余価値の生産」のいくつかの章、たとえば第11章「協業」であったり第13章「機械設備と大工業」に言及しています。この第11章とか第13章というのは、協業において労働者たちに対して、協業というかたちで組織されている労働者たちにたいして資本の支配が確立していく、またマニュファクチュア段階における科学技術が自立していく過程とか、あるいはそれ以降の大工業の成立についてマルクスは論じているという箇所ですね。ですから、繰り返しになりますけども、『資本論』第1部第4篇で描かれていた生産過程がですね、高度成長期のイタリアの工場と二重写しになる。この認識自体、今から振り返ってみると本当にそれで良いのかっていう問題が当然あるわけです。あまりにイタリア

社会を遅れた社会として捉えすぎてるという感じもするんですけど、しかし、彼らオペライスタたちは大まじめにネオカピタリズモ、つまり今日で振り返っていうところのフォーディズムですね、当時フォーディズムという言葉はなくて、ネオカピタリズモというところでなんとか分析しようとしていた。

たとえば、マルクスの『資本論』第1巻の第13章から引用しながら、当時のイタリアの新しい工場の科学技術について適用しようとしているわけです。工場全体への労働者のどうしようもない従属というものが生まれているんだという言い方をしているんですね。

また、科学技術の進歩についても、パンツェーリは注目をしています。当時、オートメーションとか第二次産業革命という言葉で語られていた「自動化工場」(fabbrica automatica)について論じています。それもやはり、マルクスからの『資本論』第1巻第13章からの引用を使いつつ、工場を分析しようとしている。こうした分析にもとづいて、パンツェーリは科学技術批判を進めて「労働者統制(労働者自主管理)」というものを対置したわけです。しかしパンツェーリが非常にはやくに亡くなってしまったので、この理論的な展開というのは中断したままです。

つぎにマリオ・トロンティ、この人がオペライスタの2人目の理論家ということになります。この人は共産党員です。トロンティはパンツェーリと一緒にですね、『クァデールニ・ロッシ〔赤の手帖〕』という年報、研究誌を出し、しかし2年後にはパンツェーリと別れてですね、月刊紙『クラッセ・オペライア〔オペライア〕』という新聞を発行して編集人になります。さらに、同じ1963年にはマルクス『経済学著作集』を翻訳刊行しています。収録されているのは、『J・ミル評注』(1844年執筆、pp.3-28)、『経済学批判要綱』の付録「『経済学批判』原初稿の断片(1858年)」(Gründrisse, S.871-947, pp.29-130)、『資本論』初版付録「価値形態論」(pp.131-163)、『ヴァーグナー評注』(pp.165-183)、付録「労働調査」(estr.da K.MARX-F.ENGELS, Kleine ökonomische Schriften)。ただし、この著作集の巻頭についているトロンティの解説論文はそんなに充実したものとはいえない。さらには、後で見る『労働者と資本』という著作のなかには結局収録されなかったわけですね。いずれにしてもパンツェーリは『資本論』第2巻の翻訳監修者であり、トロンティはこういうかたちで、それまでイタリア語に翻訳されてこなかったマルクスの断片を一冊の著作集として翻訳する。ですから、マルクスの原典の翻訳・普及にも貢献しているという点で、たんなる新左翼のイデオローグとはちがうレベルにあるんだということになります。

そして1962年の『クァデールニ・ロッシ』第2号に掲載された「工場と社会 La fabbrica e la società」という論考では、トロンティは「社会的工場」という言葉こそ使ってはいないものの、その後「社会的工場論」を呼ばれるようになる議論をもう出しています。

> 生産の資本制的形態が社会の他のあらゆる領域を獲得すればするほど、それは社会諸関係の全ネットワークを侵食する

つまり、総資本の支配が社会全体に及ぶ、これをトロンティは社会的工場の成立と言っています。やっぱり、マルクス『資本論』の協業論がですね、パンツェーリにしてもトロンティにしても重要

なインスピレーションを与えてきている。マルクスはその協業論のなかで社会的労働者ということを言っているんですね、べつに社会的労働者というのは協業によって結合している、つまり大きな工場のなかに労働者が集積されて組織されている、資本制的に組織されることによって社会化されるんだと、そういう議論なんですが、そこに着目してですね、「大衆労働者」、operaio mass という言い方をするんですけども、要するにマスプロダクションに従事しているマス労働者なんていう意味での「大衆労働者」、これが社会的労働者ということの言い換えというわけです。そして、そこにおいて社会的な工場が、つまり社会全体が工場の機能を果たすようなかたちで、総資本によって社会全体が統合されて包摂されていく、そういう社会のあり方をトロンティは当時のイタリアの高度経済成長のなかに見出している。

> 資本制的発展が進めば進むほど、すなわち相対的剰余価値の生産が浸透し拡大すればするほど、それだけますます生産―流通―交換―消費のサイクルが必然的に閉じたものになる。言いかえれば、資本制的生産とブルジョア社会、工場と社会、社会と国家のあいだの関係が有機的になる。資本制的発展の最高水準においては、社会関係は生産関係の一契機となり、社会総体が生産の一分肢(articolazione)となる、言いかえれば、全社会が工場の機能を生き、工場は、その排他的な支配を社会総体に拡張する
>
> (op.cit., pp.51-2. 強調は引用者)

こうしてトロンティは、社会的工場の成立というものを指摘している。まあでも、普通に素直に読んでいくとこれはもう、純粋な資本主義というものが成立いるんだという、捉え方ですね。そして、純粋な資本主義が成立しているそのなかで、労働者たちが労働の拒否をやればイタリア資本主義は麻痺してしまう、倒れるんだと、そういう発想になってるんですね。日本でも国鉄、全国の物流システムがあって、そこをおさえてしまえば日本資本主義の心臓部を握ることができるんだという風に考えた政治党派というのはいくつもありましたけども、オペライスタたちは言ってみれば北部イタリアのトリノにある工場を、フィアット社のミラフィオーリ工場、毎日5万人が働いているという、そこをおさえてしまえばイタリア資本主義の心臓部は自分たちが握ったことになるんだという風に、彼らは考えていました。

そろそろまとめに入らなければならないのですが、こうしたパンツェーリやトロンティの議論をうけて、アントニオ・ネグリが出てくるということになります。しかしまた、ネグリはパンツェーリとトロンティの仕事を非常に高く評価して、それを引き受ける形で議論を展開していくので、70年代に入って新しい資本主義論というのをネグリが展開したようには思いません。むしろ、ネグリの関心は国家論、それはやはり革命論になるんですよね。ですから、大工場の分析よりも革命のための戦略・戦術のヒントを『資本論』に探すという、そういうアプローチになります。たとえば、『戦略の工場』という――本になったのは1977年なんですが――72年から73年にかけてやっていた講演のなかで、「『資本論』の門をくぐることなしには国家についてのマルクスの定義に到達することはできません。『資本論』においては労働の組織化と労働に対する専制的支配の関係の

分析が展開されています」(邦訳294頁)と、こういう言い方をしていますね。ですから、時期的にいうとですね、やっぱりイギリスやフランスにおけるネオマルクス主義、国家論ルネサンスのイタリア版をやっていたのが実はネグリだったんだということが、いまから振り返ってみればわかるということですね。そしてその場合に、ネグリがマルクス主義国家論の基礎づけとして、その源泉として考えていたのは『資本論』第3部第6篇第47章のあたりですね。しかしまた70年代の中ごろを過ぎるとですね、ネグリはトロンティに対して非常に厳しい批判を加えるようになります。それはトロンティ自身が政治的なものを切り捨てようというかたちで、一種のイタリア共産党活用論というのを展開するようになる。そこで、オペライズモが一気に右派と左派へと、ざっくり言ってしまえば大きく分岐していくわけですね。

しかしまた、ネグリの関心もですね、トロンティのようなオペライズモの右派を批判する、イタリア共産党を批判するということにあるわけですけれども、さらにそれと同時に、労働者階級の自己価値増殖(autovalorizzazione)、さらには価値増殖というよりはむしろ労働者が新しい価値を創出していくんだというところに力点をおいて――『マルクスを超えるマルクス』の日本における翻訳者の方々は自己価値創造という訳語をあてています――、これをネグリは非常に強調するようになる。「プロレタリア主体の自己価値創造は、資本制的価値増殖とは反対に、自らの発展のなかで自己決定という形態をとる」(ネグリ邦訳298頁)んだと、これは『マルクスを超えるマルクス』からの引用です。ここで、この自己価値創造＝autovalorizzazioneというのは、おそらくはブルジョア国家の破壊を通じて資本制的な価値法則を乗り越えるという、そういうイメージだと思うんですけれども、そしてまたそれはおそらく、商品の交換価値に対して使用価値を復権させるという方向性を打ち出していると思うんですが、じゃあどうすればそれは可能なのという道筋は、必ずしも私がかぎりでは明らかではないんですね。それで、当時、この70年代の半ばから後半にかけての時期というのは、いわゆるアウトノミア・オペライア＝労働者自治を名乗るグループの街頭反乱というのが非常にこう激しく出てくる。68年から77年まで10年間、イタリアは68年の運動のテンションが続いたというふうに言われているところな訳ですけれども、そうした運動のさらなる大衆化と急進化ということが、当時のネグリの念頭にはある。しかし、そのことと、商品の使用価値の復権というイメージとはですね、なにかこう非常にちぐはぐな言い方をしているという印象があります。

こういう風にイタリア・マルクス主義の理論史を本当に圧縮して回顧したわけですが、ラブリオーラ以来、労働者階級の意志や実践を強調する主意主義的な傾向が強いということがよくわかります。もちろん、それは当時の主流派である経済決定論とか客観主義的な史的唯物論の流れに対する批判・対抗として出てきたわけですね。たとえばグラムシは、1917年の10月革命の直後、「『資本論』に反する革命」という論考を書いてロシア革命を肯定してみせたわけですね。先ほども繰り返したように、『資本論』の本格的な研究が始まるのは第二次大戦後。そこでもイタリアにおける高度資本主義(大工場)を分析する理論枠組みとして参照されている。あるいはいわゆる先進国革命のための国家論の基礎として参照されることが多かった。ですからイタリアのオペライズモというのは、ルカーチ階級意識論＝階級形成論＝組織論の影響下にあったと言われていて、実際そうな

んですけれども、グラムシじゃなくてルカーチなんだというのがオペライスタに共通していることなんですね。グラムシ自身は、そうじゃなくてルカーチを対置して左の線をなんとかこう出していこうとしている。しかしそのイタリアのルカーチ主義者、つまりオペライスタたちは「「疎外」の「そ」の字も、「物象化」の「ぶ」の字も」(市田良彦「解説」邦訳ネグリ『戦略の工場』)という、そういう特徴を持っている。ですから、むしろ日本において商品論と価値形態論にこれほどまでの分厚い研究がなされてきたという、むしろそのことが特異なのかもしれない。ただそれは、この『マルクスと商品語』のなかで、まずはその宇野と久留間鮫造との論争、これを置いて、さらには廣松物象化論、そして岩井克人の議論、そういったものを批判する必要があったからこそ、やはりお二人はこの商品語というところに着目してですね、これまでの『資本論』の冒頭商品論と価値形態論の解釈に対して対抗的に、議論を出してこられたんだという風に思います。しかしそれだけではないということは、ハーヴェイや、さらにはランシエール、そしてデリダへの批判もこの本のなかでなされているということでも読み取ることができるわけです。

さて、これまでのお三方は非常に内在的に『マルクスと商品語』にたいしてコメントされたのに対して、私はそこまで内在的にできなくて、なにか補助線というような言い訳でこういう形の報告をさせていただくことになりました。以上です。

リプライと討議

司会　ありがとうございます。最後に中村さんが少しエクスキューズされていたと思うんですが、ただ、この議論は、おそらく商品論や価値形態論の読み直しから利子生み資本や架空資本論へというつながりを新たに結びなおすということが、どういう運動意識と対応するのかという、そういう批判的な提起になっていたと思います。そういう意味で、またリプライを楽しみにしたいと思います。では、準備できましたら、お二人から応答をお願いいたします。

崎山　まず私から、お礼も含めてお話しさせていただきます。京都からやってまいりました、立命館の崎山でございます。まず、本をお送りしてすぐにインターネットのサイトに載せてくださった真島一郎さんと、それから図書新聞に書評を、あの短い分量のなかにあれだけの内容を寄せてくださった浅川さんには心より感謝申し上げます。そしてまた本日、我々の本のためにわざわざ報告を用意してきて来てくださった、大橋さん、中村さんのお二人にも感謝申し上げます。この土曜日の暑いさなかに来てくださった皆さん方にも本当に感謝しております。実は非常にさみしい思いをしておりました。先ほど浅川さんに伺うまでは、『マルクスと商品語』というタイトルが、ああーと言われるものなのかというのは思っておりませんでした。こっそりと……いや別にこっそりとではないんですが、立命館大学の出版助成を出したら、同じような対応をされましたので、立命館はマルクスからもう脱出したのに、マルクスから抜け出したのに、そんなことまだやってんのと。学会で全部発表してから言いなさいよと、そういうような対応をされたんですが、この本にまとめた内容を学会で発表していましたら、たぶん、井上さんとぼくは寿命が尽きてしまう

だろう。そういうことで、もう、えいやっと船をこぎ出したわけです。本書で批判した対象である榎原均さんは、かつてバラキンと呼ばれていたわけですが、いまはヒトシさんになってしまった榎原均さんが、ここは井上が書いてここは崎山が書いているというような、分担論を展開しておられますが、そういうことは、実は一切ありません。確かにある箇所ある箇所では私崎山、ある箇所では井上氏が論調といいますか、書きっぷりが表に出てきているかもしれませんが、相互の間でも、それこそ嫌になるほど積み重ねて、そしてまぎれもない共著として出したものであります。そういった点でいうと、今日ここにお集まりいただけたということは、本当にうれしいことです。もう一度申し上げますが、心よりお礼申し上げます。

それでは、順番としては報告者の発表に即してリプライをしていくかたちで話をさせていただきたいと思っております。ついでに、これはわかっていただきたいんですが、我々がこの本で一番自慢していることは、装丁です。これは、海外の在野の友人からメールが来まして、マルクスに関する本で、こういうパステルカラーが使われている本は俺は見たことがない、初めてだと。で、俺は日本語が読めないが、装丁だけで価値があると。装丁しか価値がないわけではないとは思いたいのですが、確かにマルクス関係では幼稚園にそのカバーだけは飾っても大丈夫だろうという、そういうカバーでございます。立命館大学に寄贈しようとしましたが、カバーを外して収蔵するという、そういう方針だと言われましたので、わが勤め先には寄贈しておりません。皆様もお読みになるときには、カバーをきれいきれい大事大事にして読んでいただけたらなと思います。冗談はこれくらいにして、それぞれの報告者へのリプライをこれからさせていただきます。

井上　井上です。まず浅川さんのレジュメに関してですが、「人格の物象化」について異議を申したわけですけれども、浅川さんがご報告された「人格の物象化」というものを「生産諸関係の物象化」と読み替えるべきであるということについては、まったく異見はありません。ただ、他方では、対になっているということを批判したかったので、言い換えみたいなところまではいっていないんですが「人格の物象化」という言い方でなくて、「なんとかの物象化」というのであれば、「生産諸関係の物象化」という方が正確だろうという風には思います。ただ、「生産諸関係の」と言った場合に、「生産諸関係」っていうのは資本ですが、資本も当然商品なので、関係が物象化するっていうと、やっぱりちょっと言い足りない部分が出てくるのではないかという気がするんですよね。だからそれを商品というところでおさえて、あくまで商品という運動するもの、商品―貨幣―資本という三つの形態をとりながら運動するような、特に中心は資本でしょうが、商品というその世界で、その世界の運動において、物象化するときちんと言わないといけないのかなという気がします。そうしないと、架空資本になってくると、生産関係はどうなっているんだというような問題になってくるので。だから架空資本がやっぱり物象なんですよね。だからそこまで考えると、やっぱり商品というのをきちんと踏まえた用語なり説明なりをしないといけないのではないかという気がしております。

その場合に、これは本のなかで比喩を用いていますけれども、波動関数に対する比喩として物象関数というようなことを書いているんですが、まあそういうものを考えた方がいいような気が

しますね。単に労働生産物でなくて商品になると、DingがSacheになると、なにか付け加わるわけですよね。なにか別のものになってるわけですから、それはその波動関数で表現されるような実在というような意味と、ある種そういうものが比喩として使われるようなものとして、同じような比喩として、物象関数みたいなものを考えた方がいいんじゃないかという感じはいたしました。これは付け足しです。それと、浅川さんのレジュメのなかで気になったんですが、二番の「「共通なもの」と「第三のもの」の区別」の四行目のところ、「社会的実体が商品に対象化されて結晶となったものが価値なのである」という文章があります。「社会的実体」というものがあって、それが対象化されると読まれる可能性があり、労働というのは、労働といっているかぎりは生きた労働ですよね。だから、できあがった商品を分析したら、そこにそれにあらわされた労働の、抽象的人間労働という側面が実体になっているということなんですよね。だから、商品を分析したら実体がわかるのであって、実体が対象化されるわけではないんですね。それと、「対象化されて結晶となったもの」が主語で、それが価値となっていますけれども、価値になるのは商品です。商品が価値として認められるのであって、抽象的人間労働の凝固体が価値であるのではないんですね。労働生産物が抽象的人間労働の凝固体としてみなされて、価値と認められるわけです。価値というのはあくまで抽象的で、量の契機をもちませんから、そこはかなりきちんと分けて考えないと、ごちゃごちゃになりそうな気がしたので、ちょっと気になりました。以上です。

崎山　それに加えて、これは我々が書いているうちに気が付いたんですが、相当程度、久留間鮫造さんの編さんされた『マルクス経済学コメンタール』、対訳のコメンタールの全一五巻を、問題に気が付く以前から読んでたんですが、なぜあんなに貨幣という巻が多く重要視されているのかということについて、宇野―久留間論争を踏まえたうえで、価値形態論が貨幣形態の導入によって変わっていくというその叙述の変更を踏まえることによってはじめて、我々も気が付いたことがあります。久留間鮫造さんは大谷禎之介先生とともに『貨幣論』という本を出しておられますが、貨幣ということに重心をおいた論点で『資本論』を読んでいくことで気がついたといえると思います。貨幣の生成の問題ばかりに目を向けるんではなく、「すべての商品における貨幣存在」を解き明かすということが我々にとってみたら再発見というよりも新発見に近いものでありました。それから、浅川さんにちょっとこれは質問させていただきたいのですが、レジュメの4/5のところの⑷のところで、第三巻の経済論的な三位一体のところの末尾の方に出てくる、非常にマルクスらしい文章なのですが、波線と二重線を引かれておりますけれど、これはどういう意図で引いたのかということをお聞きしたいですね。といいますのは、現行版の838頁にあたる、草稿で言いますと第二部の四の二の末尾の方に当たりますか、ほぼ同じ文章がエンゲルスの手によって第三巻の第四十八章にまとめられたことになるわけですけれども、「富の異なる社会的諸要素相互の自立化と骨化」で、コンマがあって「こうした諸物象の人格化と生産諸関係の物象化」というのがそれぞれまとまっているように私たちは読んでおりました。波線は「骨化」のところまででいったん切れて、二重線が「こうした」というところからはじまるという……自立化が骨化に対して、諸物象の人格化、生産諸関係の物象化というのがそれぞれ対応すると読むのが論理的なのではない

かと我々は考えていないわけではありません。それと、ここのところで社会的諸関係の物化というかたちででておりますが、マルクスを大切にしたい一方で、草稿から非常に完成度が高いからといってエンゲルスによってまとめられた利子生み資本の様々な叙述にしても、現行版の利子生み資本のところは大変なことになってしまっていますけれども、草稿を読めば、それが非常に完成度の高いものだということがお分かりになる。これはわざわざ浅川さんにいうまでもないことですが、社会的諸関係の物化というところに網掛けみたいのが書いてありますけれども、これは物化でいいのだろうかしら、どうなのかしらみたいなところに関しても少し考察を加えてみてもいいのではないか。そこに考察を加えて物化はあるのか、ということについての確定が必要なのではないかと思う次第です。

それと、一でお書きになられたことに関しては我々としては異論がないというか、思想的来歴が違うというのはそのとおりなんでしょうが、お書きになっていることについてなにかこちらとして、全然そういうことでは甘いよというような立場をとっているわけではございません。とびとびになりますが、5頁目の⑹の引用ですが、もちろん若書きであり十分に言い尽くせていなかったりあるいは筆が滑ったり、過剰な修飾があったりというようなことが『グルントリッセ』の他の文章のなかでも時に出てくるわけですが、これはそのまま、いわゆる『資本論』の準備労作といわれているさまざまな原稿が、そのままにして『資本論』につながっていったという風に考えているわけではないと、浅川さんのお仕事を拝見している我々は思っているのですが。何が言いたいかというと、例えば⑹の引用のようなものがそのまま『資本論』のなかに現れ出るというわけではなく、準備労作の草稿のなかで、彫琢されたり、あるいは削ぎ落とされたりというような様々な推敲の結果もあるでしょうが、それだけでなくて、例えば『直接的生産過程の諸結果』とか『資本主義的生産に先行する諸形態』などを見たら、あそこに書かれているものは『資本論』のなかに非常に魅力的な内容であるにもかかわらず出てきていないというような、マルクスによる取捨選択があったと思うんですね。そういう点で⑹に引用されているものに関しては、浅川さんによる報告は非常に重要なご指摘だと思いつつ、それについての異議はないのですが、これを同時に論じるという際には、⑴からはじまるマルクスのテクストを論じる際には、どういう次元、どういうレベルの組み合わせの中でこのほかの引用をもってこられたのかということについてのご教示をいただけたらば嬉しく思います。

井上　これは浅川さんのご報告に対してと言うことではなくて、他の方々の言われたことに関連しているので言いますけれども、無限ということについていったんですけれども、浅川さんの報告ではヘーゲルが取り上げられていますけれども、、ヘーゲルの時代には当然、マルクスの時代もそうですけれども、非可算無限というような概念はないんですね。ぼくらの本では、非可算無限というのはものすごく大きな中心的な概念としておかれていて、人間の言語が可算であるのに対して、対象世界は非可算だという風においているわけです。人間が言語を使わざるをえない動物なので、無限を考えるとどうしても広がっていく無限ですね、無限というものを考えた時にすぐ例として宇宙の大きさみたいなものを考える人が案外多いんですけれども、あれは可算の方です。

で、非可算っていうのは、いってみれば広がっていく無限に対して深さの方の無限なわけですね。一点に凝縮した深さであらわされる、そこにもたれるような無限のことなので、そういうものと人間の言語っていうものは絶対的に深淵がそのあいだに横たわっているので……ぼくらが対照的なものを捉えるときの、限界っていうことについてはこの本のなかでもかなり何度も何度も書いているわけですけれども、そこはそのいろんな概念を考える時もすごく大きなことではないかなと思っています。

崎山　では続いて、真島さんのご報告に対する応答に移りたいと思います。もちろんこの後の議論で、我々が浅川さんに対して申し上げたことに関しての議論を伺うということを期待しております。真島さんに関しては、ここまで読み込んでくださって本当にありがとう、今晩おごっちゃおうかなという、そういう気持ちになるのと、きちんと引用してくれたわけで、それも真島さんの読みとして引用が様々なところから持ち込まれているというところに非常に強い感銘を覚えます。私たちは経済人類学も含めて人類学的な知見から大いに学ぶところがありました。その一方で、これはのちほど大橋さんのご報告のなかででてくる足立明さんの引用があり、足立さんはぼくの非常に大切な先輩で、まさかあんなに早く亡くなるとは思わなかったんですが、人類学的な観点、近くはデヴィッド・グレーバーのような立場の、彼の小文字のアナーキスト的な、アナキズムの人類学的な観点からする価値論の探究というようなことにも、どうも共通した問題設定が人類学的な知見のなかにあるのではないかという……ある種の言葉としては非常にいやらしい言い方をしてしまいますが、疑いを我々は抱いています。何かというと、現在的な社会に対する批判を、使用価値の系を重視しそれを前面に押し出すことによって成し遂げようとするという、使用価値の復権と言いますか、ある意味で現代的な疎外論、疎外論的な乗り越えというような風にも思われないわけではないような、使用価値によって問題を立て、交換価値と価値とを混同するというものがあるように感じられてなりません。すべての人類学者がそうだと言っているわけではまったくないのですが、例えば、グレーバーの友人の人類学者の本を読んでもですね、あるいはビル・マウアー、ウィリアム・マウアーという、ニューヨーク、マンハッタンのあるローカルなコミュニティにおけるイスラーム金融と地域通貨の問題を取り扱って「貨幣の人類学」のようなことを展開している研究者の立場で――彼はウォール街のオキュパイ運動にも関わったものですが――書いているのをみると、使用価値の非常な強調がしばしば見られると思います。これはどういうことなのかという点については、もしお答えしていただけるのであったらばお答えを頂戴したいなという風に思います。そのうえで、これはファム・コン・ティエンの「現体」ってなんだろうねというのを、今日の京都から乗った新幹線のなかで……まあ、新幹線のなかで急に始まったものではなくてですね、真島さんのレジュメが届いた時から始まっていて、「現体」ってなんだというのを電話でやり取りして、まさかファム・コン・ティエンが襲いかかってくるとは思いませんでした。この引用はすごく……孤高の哲学者といったらば、それはキャッチフレーズとしてはかっこいいのですが、非常にユニークな思想を展開した、六〇年代にベトナムで青年、学生に熱狂的に読まれた世界批判、戦争批判の立場の思想のなかからの言葉っていうのがどういう重みを持ってそこで引

用されているのか。そこで、「現体」というのを先ほど真島さんは「現前」と考えてもらっていいですよとおっしゃっておられましたけど、「現前」でよろしいのかなということについてどうお考えなのかというようなこともちょっとお聞きしたいなという風に思いります。

井上　ぼくの方からは一点だけ、真島さんに教えていただけるとありがたいと思っております。それは、まだ出ていないんですけど補論を書いて、そのなかでもう一度価値形態論について言及しているわけですけれども、初版の本文の価値形態論は、形態の三は、一般的価値形態の部分が非常に分量多いんですよね。価値形態の一がもちろん一番多いです。でも、第二版以降だと価値形態が圧倒的で、ほとんどすべて価値形態一ですが、初版本文の価値形態論は、ほとんどというくらいに形態三の分量が多いんですよ。それはなんでだろうということなんですが、初版本文の価値形態論というのはぼくらの本で言うと、社会的というのを私的-社会的というのと自然的-社会的という風に、社会的を二重に捉えなきゃいけないということを主張したんですね。初版本文の価値形態論は、自然的-社会的な関係における記述がほとんどゼロです。結論だけあって、それを解説するみたいなところはほとんどゼロです。それの部分が第二版ではかなり詳細に書かれています。それに対して初版本文の価値形態論は、私的なものに対する社会性に非常に重点が置かれて書かれていて、社会的なものになるとはどういうことかということがすごくたくさん書かれているんですね。要するに、初版本文がどうなっているかというと、商品が現実的に現れるのを理論的に解くと、一般的価値形態をとるしかないということがはっきりと言われています。価値形態論の次に交換過程論がありますけど、そこで商品が歴史的現実的に現れると一般的等価物は貨幣になるという、貨幣形態をとって現れるということを理論的に証明している部分だとぼくは思うんですね。初版本文の価値形態論はそういう風に証明しているにもかかわらず、第二版でそれを壊しちゃっているわけですね。壊したのはなぜかということを二人でもだいぶ議論しているんですけれども、まだわからないんですが。当時の、今でいう文化人類学とか社会人類学とか言われている学問ですね、そういうものに対する知見というのはマルクスは圧倒的な最先端にいたんじゃないかとぼくは思うんですよ。それは、『古代社会ノート』とか、いろんなものがあって、MEGAでは残念ながら第四部が出ないんでしょうが、ノートの類をもし詳細に調べることができたら、その当時の、今でいう文化人類学的な知見が、ほとんどマルクスはトップに立つような人として存在していたんじゃないかという感じがするんですね。そういう膨大な知識とトップの位置にいるがゆえに、むしろ貨幣生成論的な理解に傾いたところがあるんじゃないかという風に疑問としてあってですね。当時の学問的な水準だと貨幣生成論とかそういう学問がどうなっていたんだろうというのを、教えていただければありがたいなというように思っています。

崎山　例えば、我々の目から見ると貨幣として見えるし、そのように概念規定するわけですが、その当事者たちにとってみたらそれはどうだったのか。ということが、常に人類学のフィールドにおいてもそういう問題というのは日々起こってきますよね。それはもう単に認識論のレベルにとどまらないような深い問題をもっているという風に思っているんです。マルクスはまた非常に素

直な学問の人でもありましたから、今井上さんが言っておられましたけど、毎日毎日英国博物館にかよって、その図書室、今現在ではBritish Libraryになった図書室で、日々入ってくる人類学的な様々なペーパーや本を読み解いていくというようなことをやっていたということが……そのとき読んだものにマルクス自身が振り回されているようなところがあるような気がするんですね。これはマルセル・モースなんかにも通じていくような人類学のなかでの流れということと、マルクスとのあいだの距離感みたいなところも問題として存在していると思いますので、それについてお教えいただけたらという風に思います。

続いて大橋さんなんですが、非常にありがとうございます。こういう主要該当箇所で、こちらが繰り返し繰り返しわざわざなんで「語った」「語る」というのを、ドイツ語の活用形、不定形といいますか、元の形ではなくてそこで使われているのをそのままに入れていったのは、これはどれほど使われているかという、商品が語るという……実はですね、語るということをめぐって、「ぺちゃくちゃ口にし」という訳にしましたけれども、「ぺちゃくちゃ」というのは日本語訳をしたのでこのオノマトペを使ったので、原文では「ぺちゃくちゃ」に当たるようなものは実はないんですね。自分たちのさまざまな貨幣名で語り、という、そういうことで、それだけ一斉に語っているのだったら「ぺちゃくちゃ」だろうということなんですが、語るという言葉で言い得たものと言い得ないレベルのものというのが、たとえ商品語という概念を中心にしてもあっただろうという風に考えざるをえないだろうと考えています。それはこの本のなかで、今日批判も含めて皆さん非常に好意的に評価してくださって、とてもありがたいんですが、一方でですね、マルクスお前、十分かけてないんじゃないのという風に喧嘩を売ってる本でもあるんですね。一九五八年に出された、中野正さんという東大の経済学者の『価値形態論』という本が、今日本評論社から『中野正著作集』というので、非常に高い値段ですが出ていて、中野価値形態論を聴かなかったらだめだというので、彼の価値形態論の授業には東大生がわんさか押しかけていたという、すごい気持ち悪い状況があったらしいのですが、中野正の『価値形態論』というのを読むと、すごい厳しいマルクス否定なんです。批判というよりも否定に近い。マルクスは全然できていないという中身になっています。そういうことは、我々はできなかったといいますか、マルクスを読んだらば、否定ではなく十分に書き得なかったり、あるいは書き損なったりしているのではないかというところで我々は立ち止ったわけで、それは大橋さんがひっぱってこられたレジュメの1頁目の左下の引用のところにあらわれている内容とそれがどこまで届いているのかというようなことに関係はしています。レジュメの三ページ四ページのところで出てくる、マルクスの「廻り道」からの問題ですね。⑹⑺以降のところは井上さんから話していただきたいと思います。

井上　えっとですね、それより前に、価値形態論を、集合論を使ってあったと大橋さんの報告でWについて書かれているんですけれども、大橋さんのレジュメに「集合Wは労働生産の結果として形成されたものである。ここから逆算的に価値形態論のあり方を考えることができるのではないか」ということがあります。実は、そういうことを全部切るために、Wを入れてるわけですね。だから、どんな生産がなされたかとか、そういうことじゃなくて、ある瞬間みたいなものを考えて、そこに

ある商品全体の集合をパッと観念するっていうことが目的だったんです。だからこういう風には思考しない。こうすると、それこそ宇野派すら出てくると思うんです。それから、三ページ目の能動・媒介・受動というのはやっぱり、同時という現実が一瞬のうちに……人間語っていうのはやっぱり線形的な順序があって、前後関係がどうしても生じるわけです。前があって後ろがあるんですね。前があって後ろがあるっていうのは時間順序があるということなんですけど、等置関係でなされていることは一緒に、等置された途端に全部一斉に起こっているので、無時間的だ……そこをどう表現するかということはだいぶ議論したんですね、なんて書いたらいいんだろうと。苦労したんですけど、一応無時間的とか多数時間的とかあんまりできのいい言葉ではないと思うんですけれども、そういう風に表現をいたしました。それから、六ページ目あたりに出てくる全体とかっていうのがありますよね。これはさっき申し上げた無限についての考え方の、この無限のタイプはどうも可算的だよなあというイメージがあるんですね。どんどん増えていって、ではないんです。ちょっとそういう感じがあって、思考可能なものの全体って言ったときに、一個の命題のなかに無限が入ってきても当然意味があるんですよね。あるいは二つの命題を考えた途端にそれは対象に規定されているので、対象の非可算性が言語の抱えている〈口〉を通して、ぼくらのことばでいうと〈口〉を通して〈呼吸〉すると、それは非可算性を〈呼吸〉するわけです。そこに非可算性が反射することはあり得るとぼくは思うので、数が増えるとかそういうことではない。無限というのはですね。そこは、なんとなくそんな感じがいたしました。

崎山　ぼくはそのあとの、大橋さんのレジュメの六ページ目なんですが、カンタン・メイヤスーの『有限性の後で』はもうぼくはひいひいいいながら読みました。出てすぐに買ったんですが、難しいということもあるのですが、一方で、バディウが入ってきているというところにぼくは非常に大きな問題があると思っていまして、友人の数学者たちから、バディウの数学論を非常に厳しい目で眺めているんですね。数学のプロがそうだからぼくらもそうだというような付和雷同をするつもりはないのですけれども、数学者の側からのバディウの数学論、集合論、科学について正面切って取り組んだきちんとした論文が出てますので、それでそのあたりを考えていただきたいんですが、例えばカントールの定理と書いてあるのですが、それは連続体仮説のことなのかな、どうなのかなという。

それと場の量子論の話をされてましたので、二〇世紀になって相対性理論と量子論が登場して場の量子論が可能になったことによって、本当にそこに行きつくのかというほどの楽観主義にはわれわれは立てないのですが、人間が類としての自己解放を成し遂げるようなことができるような新たな個と共同性とを創出していくことができるのであったらば、万物理論に近づいていく可能性は否定しえないだろうという風に思っています。万物理論というのは物理学で宇宙の成り立ちを説明しちゃうというそういうことですけれどね、ただ、それは人間の行為を物理学で説明するというような馬鹿げた話ではなくて、宇宙の成り立ちから現在までの有り様ということについての理論的なパースペクティブをきちんと人間が人間の頭脳で獲得するということになると思うのですが、その際に必要となってくる言葉というのは、メイヤスーが考えているような非人称

的な数学の言葉であるのかなという気がするんですね。メイヤスーが考えている非人称的な、数学的な思考、現在の世界における偶然性、閉じられた系における合理的な思考の不可能性をそれに対して十分対応できるようなものが数学的な思考だという、メイヤスーのこの「数学」というのは、現時点では、金融工学以降に登場してきた経済物理学などにあらわれているようなタイプの、量子力学の応用編みたいな、現状追認の現象説明ということに近いような気がしてならないんですね。よく共産主義という名前を使って、ジジェクとバディウはちょっと許してほしいなという気がするんですが、バディウを援用しながらメイヤスーがいわんとしたことは、ぼくが今言ったようなタイプのものではないことをいわんとしたんだと思うんですね。それは決してオプティミスティックなものでもポジティヴなものでもないかもしれないけれども、しかしそこでいわんとしたものがあるわけですけど、文章からこちらが受け止めていく際の非人称的な数学の思考の可能性というのは、人間を切り捨ててマシン・トレーニングをやっている現在の金融商品の運動にこそふさわしいという現実が、厳然として存在するということをどうしても想起させてしまう。そうではない可能性をメイヤスーの思想のなかに読み取りたいとは思うので、ぜひそのあたりについてお教えを賜りたいと思います。

次は中村さんのご報告に対してです。これも二人で答えますが、まず最初は、真島さんのこれまでおやりになってきたお仕事のなかでもたぶん経験しておられると思うのですが、例えばマルクスに関しての議論が、自分がナショナリストになりたくないのだとしても、日本はとびぬけて蓄積があるということは、これは間違いない現実です。様々な言語に訳されて『資本論』は現行版ですが存在しています。英語版で出回っているものといったらば、今現在もっとも出回っているものはペンギン・クラシックスに入れられたエルネスト・マンデルの前書き付きのベン・フォークス版だろうと思います。『資本論』初版出版百周年にアメリカ合衆国のベーシック・ブックスから出されたそのあと、繰り返し様々な出版社から版を重ねられて今現在最終的にペンギン・クラシックスに入ったと思うんですが、これはエンゲルスが監督をして訳した英語版を、参考にしたのかどうかという点からして、新MEGAを研究されている浅川さんにおたずねしたいところなんですけれども。こういう訳をしちゃうのですかというタイプの訳なんですね。初版と初版の付録まで含めての全部とですね、ドイツ語の第二版とフランス語版と、それから現行版ですね、第三版以降のもの、一八九〇年から九四年にかけて出されたエンゲルス版、現在言われるような街に出回っている『資本論』といった、それらをすべて読むことができるのは、日本だけであるという風に思います。私が言いたいことは、こんな翻訳で出てるの、という訳語の選択も含めてです。私はラテン・アメリカで研究をやっているんですが、ラテン・アメリカでいきわたっているスペイン語の訳の資本論というのは二種類あるんですね。一種類は世界的に出回っていたモスクワのプログレス出版が出したスペイン語版で、すさまじくスターリンのにおいがぷんぷんするという。ところどころ文章が訳されていない。そういうことやっていいのかという、恐ろしい翻訳です。超訳とかいうのもありましたけど、この場合の跳躍はジャンプという意味ですね。ジャンプしてしまうという訳の本が出てるのと、もう一つは、二十一世紀社という、これは新左翼系の出版社なんですが、これも、マンデルが仕切って英訳で出されたベン・フォークスの版をもとにして訳されたんです。

ですので、ドイツ語、英語、スペイン語というゲルマン語からアングロ・サクソン語になって、スペイン語になっているので、はっきりいってトンデモ訳なわけです。そういうところで、商品論の論争とか、価値形態論の論争とか、生産様式論争だとか、なぜ可能だったのかということの方が、かえって不思議な感じがします。『グルントリッセ』なんかもちゃんと訳が出てるのですが、これも英語からの重訳なんですね。直接ドイツ語からスペイン語に訳すということになると、非常に苦労を伴うだろうという風に思うのですが、しかしそういう訳っていうのは今現在のラテン・アメリカには流通していない。結果としてマルクスの『資本論』をめぐっての議論というのが十全に展開されることではなくて、議論されるのはマルクス主義に関する議論です。それはやはり多くはスターリニストであり、一部トロツキストもいて、そのほかにネオ・グラムシアンであるとか、そういう系列はあるのですが、議論の有り様っていうのは主義の話になってしまっていて、概念や範疇が正確に用いられているとは到底いいがたい。その結果として、出てくるものというのが、当該社会を分析する非常に研ぎ澄まされた理論的道具ではなくて、ある種の政治的な系統を主張している。

例えばグラムシの南部問題というのは、二重社会論ですよね。一定程度の資本主義化された北部と非資本主義的な南部。その類の話というのがついこのあいだまであった。にもかかわらず階級はちゃんと存在してるんですよ。階級が存在しているのにもかかわらず、議論はそういう現状や現実に届かないし、架空資本という言葉はまったくスペイン語圏のマルクス関係の人々から聴いたことはございません。少しだけ付け加えると、レギュラシオンの一番若い世代が架空資本というタイトルの本を出して、これは英訳版も出たのですが、現行版の、エンゲルス版の利子生み資本論をもとにしてるので、内容はまったくなくて、なんと途中からハイエクの議論を導入してきて、困るとカール・ポランニーに逃げ込むという、とてつもなくすばらしい本になっていて、結果としてはそういうなかで、これはフィクションなんだからフィクションであるということを暴いて、そういう政治的な主張とそのもとで架空資本をコントロールするのだという、そういう意見なんですね。これはすごい不幸な話だと思います。かつて、状況としては植民地経験を持っているようなところに届いてきているものが、やはりそういう面では相当低開発の状態に置かれているというのはマルクス関係の研究においても一緒なのではないかということがあって、どうやったらそれを超えることができるのかという、中村さんの発表の中で様々な思想家が出てきて、そのなかでの論争が、翻訳がされて、トロンティはここまで翻訳してるのねという、一方で面白かったのですが、しかしその一方で、議論がやっぱり主義の話でやりとりされてしまって、レーニンが戦略の工場だったりするということかなと思います。

井上　運動との関係で、厳密な理論から出発できるのかとおっしゃっていたのかと思うんですけれども、対象世界は非可算なんで、ともかくたかだか可算の世界でしかない言語で接近する以上は、可能な限り厳密にしないとだめだと思っています。それでも、たかだか可算の世界ですね。だから、対象世界は運動しているので、言語で切り取った途端にもう前が、違ったものに対象は動いているわけですね。だから動いていくようなそのところのものも含めて考えたうえで、言語化しなく

てはいけないと思っています。それとの関連でですね、ぼくらの本ではできるだけ概念を厳密にしようという意識がありました。それは、引用というか言及されているので、外れるかもしれないんですがちょっと申し訳ないなと思ったのは、例えばネグリの二つの本があげられてますよね。ぼくは、あれはスターリン思想のものだといってるんですね。彼らは概念を全然検討していない。例えば、レーニンは戦略という概念をもちません。それはほとんどの人はわかっていないんですけれども、ぼくは三十代のころに、レーニンには戦略という概念はないということにふと気が付いて、そのころは検索もできなかったので、レーニン全集、日本語ですけど、全部調べたんですね。戦略という言葉は、せいぜい十個もなかったと思います。彼にあるのは戦術なんですよね。戦略っていうのは、権力をとったあとの内戦期に、だから軍事的な問題にからめて戦略・戦術という言葉が使われたりするんですけれども、ほとんど概念としては規定されていない。一方の戦術は『二つの戦術』をはじめとして常に厳密に概念規定されています。そういう一つ一つの概念を、きちんと全部再検討して、自分の理論をつくっていかないと、対象世界には全然接近できないという風に思います。

崎山　中村さんのご発表を聴きながら思ったのですが、アフリカ云々という風に書かれていたんですが、中村さんのレジュメの五ページ目に明日のルネッサンス研究所という、社会運動の研究部の主催での合評会の趣旨文が書かれているんですが、現在ラテン・アメリカにおいてもアフリカにおいても登場してきているブルジョワジー、新たに登場してきているという風に考えているんですね。ただそれはかつてのように、国民国家の形成のプロセスのなかに階級が形成されていくということではなくて、あまりこの比喩を使いたくないのですが、クラウドのようなタイプで、あちらこちらに小個体のようなかたちで資本の人格化が登場するということになっていると思います。中央アメリカに関しては、『MBAたちの中米改革』という本が出てまして、これもアメリカ合衆国で、例えばイェールで学ぶ、シカゴで学ぶという、そういうところでの金融技法などを学んできたような人々が、層として存在してある国にいるのではなくて、様々な国の中に一定程度いて、その人々の活動というのが、まさしくブルジョワジーが現在架空資本をめぐって行っている投資活動、利潤獲得の衝動に突き動かされた運動になっているというようなものになっていると。一方でプロレタリアートの方はどうかというと、これまた各国のなかで、貧しいものがもちろんこれまで存在してきましたし、貧困化は一九九〇年代以降ものすごい勢いで加速をして国境を越えて大陸レベルになっているという風に思います。もちろんそれぞれのリージョンを考えてみると、リージョンごとに少し違ったものが見えてくるところもありますが、まとめると、やはり国民国家のなかでの国民的なプロレタリアートというような形ではない広がり方、というよりもあちらでもこちらでもという遍く存在する貧困化へと突き進んでいくような人間性をはく奪されている存在の群れというのがあるのではないかと。

階級分析もしなきゃいけないなと思っているんですが、それは固定的な形のものではありません。この本来の本に関して少しだけ触れたものも含めて、今後その架空資本の状況をより精密に分析していきたいという課題が一つ。それには、イスラーム金融、ビットコインをはじめとする仮想

通貨の問題、この二点が軸となって入っています。もちろん、デリヴァティブの問題も抜きにしてはできません。簡単にデリヴァティブと語って済むものではないので。その二つの軸と、一つの、すでに世界に蔓延している金融派生商品の在り様ということを、きちんと解明する。批判的に対抗する道筋を探すというのが一つの課題です。それからですね、マルクスが取り組んでき、『資本論』に向けてということで考えられてきたこれまでの様々なテクストのなかから、より根源的に、富とは何か、価値とは何かということを考えていく作業が必要になると思います。で、それはすぐさまできるというよりも、一体マルクスは『経済学批判要綱』をはじめとして、『資本論』へと向かっていく日々の中で、どういうものを活かしどういうところにさらに探究の手を伸ばし、なにを彫琢し、なにを、豊かな表現でありながら切り捨てる取捨選択したのかということの点検からはじめなければいけないと思うんですが、根源的に資本主義のもとでの富ということではなくて、人間が解放されるための価値を、富の在り様というのを批判の作業として考えていくということが大切だろうと思うんですね。まずはその入り口として一つの本を出しましたけれども、今後は架空資本の問題を軸にして富の問題といった根源的な課題に取り組んでいきたいと我々は考えているところです。何年かかるやらということになりそうですが、もしまだ皆さんがそのときにも関心を持ってくださるのでしたらば、次のときにもぜひ参加して議論に加わっていただきたいなと心より思っております。今のところ考えている課題はそんなようなもので、今日の報告された方々はすべてイスラーム金融のことを回避してくださったのですが、つい先日、大阪府の北部を震源にした地震があったのですが、仕事場で今私寝てるのですけれど、上から落っこちてきた本は全部イスラーム金融の本でした。マウアーにどうも恨まれている節があるのですが、イスラーム金融というのはポスト資本主義でもなんでもなくて、イスラーム金融でこそ、今のグローバルな資本主義というのは矛盾をものすごい勢いで深めながら運動を続けることができるという風になっているのだろうと思うわけですね。イスラームの知見をお持ちの方がもしおられたならば、ご意見を伺いたいなという風に思います。長々としゃべりすぎました。これで一応報告された皆さんに対しての著者の側からのリプライということにさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会　著者お二人から報告者に質問が出ていて、もちろんこの後懇親会があるのでそこでも聞けるんですが、聞いた以上はここにこられた方も答えは聞きたいと思いますので、五分くらいでもよろしいので、それぞれの報告者の方からリプライへのリプライをお願いしたいと思います。では、浅川さんよろしいでしょうか。

浅川　それでは、ちょっと順番は変えさせていただいて、やっぱり一番重要なのは、ぼくのレジュメでいうと最後のところで引用させていただいた『グルントリッセ』からの引用、なぜこれをここに掲げたのかという点からお答えした方がいいかと思います。まず、まさにここに答えがすでにあるということではなくて、おっしゃっていただいたように、それに対して彫琢していくことを前提に、原石はなんだったのかという、内容としていわんとしていたことはある程度、まったくそのまんまではないにしても基本線はそこにあっただろうという意味で出したと。特に、人間が社

会形成をする能力、そういうものが、物象に媒介されることによってどうなっていくのか。おっしゃっていただいたような、利子生み資本の実際の、環境との矛盾とか、そういう矛盾が暴走する側面ということが、結局人間の能力も転移、社会形成能力の転移としてあり、だから深刻な問題を引き起こすのだというその初発の問題意識がここにあらわれているだろうという趣旨でした。それから、これはちょっと簡単に、今回正直言うとこそこそと隠れて問題から逃げようと思っていた価値、大事なところなんですが、特に他のお三方との関係で問題が狭くなりすぎないかなということがあって、価値実体ですね、ちょっと非常に気にはなっていたんだけれどもあまり触れないでおいた方がいいのかなと思っていたのがしっぽがでちゃったんですけれども……非常に、共通点としては「共通のもの」と「第三のもの」との区別というのが理解できたというつもりでいるんですが、その場合、価値実体がどうかっていうのが、改めて自分の理解に関してもなんですが、ちょっとまだ整理ついていないところがあるんですね。そういう意味では、これはたぶん自分の課題としても、一番はもちろん本当に自分がわかっていたのかどうかというところになってきてるかもしれないと思っています。それからあと…。

崎山　波線と二重線の部分、レジュメの4/5と書かれたところ……。

浅川　そうでしたね、物化の問題。これに関しては、文章の読み方の問題もあるんですけれども、物化のところは、このテクストでは簡単ですが物化そのものは説明されているわけですよね。「素材的生産関係とそれらの社会的規定性との直接的癒着」。これはやはり物象化とは明らかに違うことを言っているわけで、物化という概念……概念にまでなっているのかどうかというところが問題になっているのかもしれないですが、少なくとも現象を何とか理論化しようとしていたことは明らかなので、それを位置づける必要があるだろうということと、それとその切れ目の問題なんですけれども、おっしゃる通りです。そのように読んでるわけですね。「富の異なる社会的諸要素相互の自立化と骨化、こうした諸物象の人格化と生産諸関係の物象化」の「こうした」は「骨化」までを受けていると解釈しています。それとは別に「生産諸関係の物象化」と続いているという読み方です。これがいい読み方かどうかは、いいと思ってはいるのですが、ちょっとどこかで具体的にお話しできれば。

崎山　このことによって大きく浅川さんのお考えとぼくらの見解が衝突するというわけではないとは思うんですが、特にここの部分というのは、非常に……いかにもマルクスらしい見事な表現である一方で、やっぱり草稿のままで途中で残されたものがそのまま三巻にいれられているということもあって……。

浅川　もちろん、『要綱』だけで議論できるものではないと。

崎山　はい。このテクストの一部だけを取り上げてということにもならないと思いますし。その

ことは、これはこれでこういう読みに近いということでいいんじゃないかなと。……どうしても「自立化」「骨化」というのが「人格化」になるということが持つ意味合いが同じなのかという問題がもちろん生まれます。だから、そういうことに関しての議論は続けていけるのではないかと思います。どうもありがとうございました。

真島　二つご質問いただいたと思います。最初のご質問なんですが、さっき言い忘れたんですけれども、崎山さんがナショナリストというわけではないんだけれどもとおっしゃった部分についてなんですが、この本の後半部分というのは、前半が厳密なテクスト・クリティークだとすると後半の第三部以降というのが「今日の資本主義を批判するために」からはじまって、冒頭商品論に関する様々な論者の所説についてということで、私は読み手としては、自分の受け取るものが正しいのかどうかということを確認させていただく感じで読ませていただいたんですけれども、国外の論客はそうそうたるメンバーが並んでいて、アルチュセール・バリバールグループとかデリダ、ハーヴェイ、ジェイムソン。だけども、やっぱり私が本当に圧倒されたのは、国内の所説に関するお二方の批判の内容で、先ほどから何人もの方が言及されていますけれども、とりわけ久留間鮫造の所説についてというところは本当に圧巻でした。それをなぜ言ったかというと、「商品は価値と使用価値の統一物である」ということをはっきり述べた後で、価値に対して使用価値が重視されてきたということについての人類学についての一種の疑いについて、崎山さんがおっしゃられたところっていうのは、私は後半部分の柄谷行人に関する批判、特に四四六頁に……私頁を特定できるんですけれども、その批判というのはごもっともだと思うんです。全部がそうだとは限りませんが、現在のポランニーからグレーバーにいたるというかたちでおっしゃられた、人類学の趨勢のなかで、使用価値ということに絡めていうとすると、存在論とはいいながら、存在論的差異が忘却されたまま存在者のアジャンスマンだけが論じられているんです。なぜそうかというと、モノグラフの中で存在を描くというのは非常に難しいことであって、底なしの闇を間接的に描くしかないんですよね。否定的なものというのはそれだけでは記述化できない。だけどもそうすると、お二方が批判されたような使用価値に対する非常に純朴な評価の仕方につながっていくのは、まずいと思っています。

それから、二つ目の質問に入る前の、ちょっとしたおたずねで、「現体」は「現前」でいいのかというのは、これは訳者の野平さんの割り値を安易に利用させてもらって、そこにあの「現前」と割注が入っているんですが、実はその前に、「現体」というのが出てきて、ニーチェの「現体」と「深淵」ということに言及しているんです。その場合の「現体」というのはDaseinです。だからそこら辺のところは、崎山さんがなにを少し疑われているのかというところは、私は直感できたかなと思っているし、もともとハイデガーをティエンが読んだのは、ベトナム戦下におけるSeinとは何かという問題ですよね。そのことのかかわりでいうと、「現体」はそれでいいのかという疑問はもっともだと思います。

二つ目、井上さんの方からいただいた質問かと思うんですけれども、貨幣の話。貨幣はですね、これはちょっと私も準備しておりませんけれども、それは人類学の古典的な議論のなかでは

Primitive Moneyと呼ばれている原始貨幣論のなかでの話で、確証はとれないのですが、私の印象でいうと、原始貨幣論みたいなものが、ある盛り上がりを見せるのは戦間期なんですよ。モースも戦間期に貨幣論を出しているし、ただモースの場合は為替論と並行して書いていますけれども、そうなると、マルクスが第二版に手を付けた一九世紀の後半あたりの原始貨幣論というのは、そこらへんで盛り上がりを見せる貨幣論の一世代ないし二世代前の議論になると思うんです。それは、グレーバーが『負債論』のなかで原始貨幣論の神話みたいなことを一章割いて書いていますけれども、あそこのビブリオがどうなっていたのかということはちょっと気になります。ただ、グレーバーの場合は、要するにそれは原始貨幣の議論の枠の狭さみたいなものを主張する内容になっていると思うんですよね。むしろ私はそこら辺のところで感じたのは、二四六頁に商品語という場の中で「貨幣以外のあらゆる商品が、その「世界」の「市民」であり、各々自分にだけつうじる〈言葉〉をしゃべるなら、貨幣の〈言葉〉は「商品世界」の絶対的な「帝王」としての一方的な詔であろう」というところがありますよね。人類学の貨幣論というのは、こういうバックグラウンドをもって話している感を私は持っています。つまり、商品論において一般的等価形態がかたまっていくというなかで、それが王権とパラレルに発想される。それがヨーロッパ的な発想なのかどうかはわかりませんけれど、それは感じています。確証がない、勘です。

大橋　ありがとうございます。きっとバディウの名前を出したら怒られると思って、そうだろうなと思って、少し議論の温度を上げるためにいれてみたというのはあるんですが……あの、集合Wと言ったのが非可算的だっていうのは、ぼくもそう思っていまして、しかもそれが内側に折り込まれるかたちの。そこにおいてはカントールの連続性仮説的なものでいいと思うんです。あらゆる集合は、自らを超える集合を必然的に内包するということですから。ただ、無限の内包になっていたものが、商品語の世界のおいてどのようにみられるかということが先ほど、関係性そのものが商品になりえるということを井上さんはおっしゃっていますけれども、そういったところで少し見つめていってというところが自分的には、今関係性はうちの領域で流行っているんですけれども、でもその実体がという言い方をすると関係性じゃなくなってしまうという、つねにこうあいまいなものなんですが、マルクスの議論の中ではどうだったのか改めて考えてみたいと思いました。考えていったら非可算的な集合なんですけれども、内包性というところをもう少し強調すべきだったのかなと思いました。

もう一個なんですが、バディウからメイヤスーに関しての推移なんですけれども、バディウは存在論的な集合を考えているわけですよね、基本的に。カントール的なものも、非常に平板なものになって。メイヤスーは、いいのかわからないですけど、一応バディウはそう言っているんだけどということで、それを公理系に適用するわけですね。そうすると公理系の集合体系といったものが、科学的なものの厳密性といったものを規定してきたんだけれども、でもその公理系を集合として考えると、その公理系はつねに閉じられていなくて、絶対もう一個はみ出してくる。まあ、集合論考えるとそうですよね。そうすると、あらゆる公理系は、その公理系をだめにするかもしれない公理を生み出しうる。そこに偶然的なものの可能性があるというのがメイヤスーの立論な

んですよね。で、これを非常に平板に解釈すると金融工学や経済物理学のお話になるわけで、カタストロフィーとか恐慌というもののという話になってしまうと。でぼくはその可能性もゼロではないし、それは安直な転用だと思うんだけど、もう一個可能性があってそれは非常に人間的過ぎて、いいのかどうかわからないんですが、例えばみずほ証券のシステムクラッシュがあって、原因は人為的なミスであると。お茶こぼしたとか。これは、経済物理学じゃはかれないんです。高度に完成されたシステムをクラッシュさせる要因というのは常に偶然的に、違う次元で誰かに準備されているという風にメイヤスーを読むと、ヒューマンスケールなレベルで考えられるんですね。ただそれをどうとらえるかというわけなんです。何かをやらかしてしまう可能性という人間の本質があるんですけれども、逆に理論としてはあらゆる富というものをいままでの強弱関係から解き放って、あらゆる人にという、理論的な整合性や倫理的な個性性みたいなものを配慮しないといけないというときに、人間がどのような存在であるか。ちょっとそういうことには抵触しかねないわけです。なんでこんなことをいうかというと、カンギレムについて、フーコーは珍しく人間存在を誤る存在だと定義したことがあって、そういうのを考えると割と面白いかなとおもったんですが、ただその人間が高度に完成されたシステムのなかでまったく外在的に、そういうクラッシュする要因として、人間が間違ったことをしでかすやらかすということが常に、ぼくが非常にヒューマンスケールで解釈したメイヤスーのなかにはありうる。それを現在どう意図的にシステムをはみ出す人間をつくるかというときに、個人的にはラッダイトとかしか思い浮かばない。それは違うと思うんですけれども……。

崎山　『文藝春秋』かなんかだったかと思うんですが、「フラッシュ・ボーイズ」というのが訳されていまして、これはコンピューターのマシン・トレーニングがコンピューター・プログラムでアルゴリズムを構成して、競争になって、そういう点では人間はいるんですが、プログラムを組むことかを含めて、ヒューマン・ループと通常言われる人間の時間における介入がないと、一切のマシン・トレーニングができないわけですね。勝手に機会が動き始めたら『ターミネーター』の世界にしかならないわけなので。エラーを起こしているということだけで金融業界におけるシステムリスクみたいなものが起こるということではなくて、それこそメイヤスーがいうような偶然の、それが可能的な原因の、偶然の偶然的な結合によってシステム中枢にいっきょになだれ込むみたいなことはあるんじゃないかなという風に思います。お茶こぼしたということでみずほがシステムリスクをおかしてたら、それはみんなしてお茶をこぼしにそれぞれの証券会社にいったならば日本経済も帝国主義から脱落するだろうという話になりそうですけれどね。グレーバーあたりだったらね。そうではなくて、仕組みそのもののなかには仕組みにうまくおさまらないようなものが常に前提されているということにおいては、おっしゃることは確かに十分理解できました。ありがとうございます。

大橋　メイヤスーは偶然ということをいうときに、なぜかアラビア語の語源を出してくるんですね。

崎山　なんでですかね。

大橋　わからないですね。意図が不明なんですけれども、面白いなと。ひょっとしてなにか思いつくことがあったのかもしれない。ありがとうございました。

中村　リプライありがとうございました。まず崎山さんのご指摘に関しては、確かにイタリアの場合七〇年で見てみると、私の知る限りでは三種類の『資本論』が出ていますが、三つともエンゲルス版のものです。ただ、日本の場合に関しても、よくよく考えてみるとこの三つは、江夏美千穂さんの訳です。しかも、『資本論』草稿集にしても完結していない。ですから、日本のマルクス『資本論』研究も非常に厳しい状況にあるのではないかと思います。

崎山　あの、e-bookになって、セットで大学が入れたらば誰でもアクセスできるようになっているので。全部で、一五、六万で買い入れることができると丸善の店員が誘惑しに来てました。まあ本としてはもう出さないで、電子媒体で配布するということに決めたみたいです。

中村　井上さんリプライありがとうございます。先ほどのお話で、対象世界は非可算であるのに対して言語は加算的であると。対象の複雑性というか、できるだけ厳密に言語は定義しないと、現実に対して挑めないと。それは確かにそうだと思います。ただ、素朴な疑問なんですけれども、理論を厳密にすればするほど、実践の契機が出てこなくなっちゃうんじゃないかと。むしろ理論に対して弱い規定、重すぎない定義をすることによってむしろ実践の読みがひらかれていくんじゃないかという風に思っているんですが、それは間違いですか。

井上　うーん、難しいですね。戦術というのを考えた時に、戦術というのはぼくのイメージでは、これも根本的に問い直さないといけないレベルなんですけれども、戦術という概念とはなにかという風に。それはまだできていませんけれども、いってみれば、そういう具体的な実践そのものを考えた時に、言語で表現されるぎりぎりの線が戦術だと思うんですよ。そうである以上そこを緩くするとまずいと思うんですね。だから、そこはものすごく的確な概念、一点。それはレーニンの場合だと『二つの戦術』、あれはすごく見事な戦術の章なんだと思うんですけれども、あれが言語で表現されたぎりぎりのところを表現していると思うんですよね。やっぱり緩くするというと、それこそ問題が緩くされる気がして。

崎山　彼が中心となって著作集三巻がでてるんですが、ずっと無視されてきた加藤正というマルクス主義哲学者のことを我々非常に尊敬もしており、加藤の考えからも学んでいるのですが、加藤の書いた様々なテクストのなかで、「合理主義の立場」というテクストと、これが青空文庫かなんかで、電子媒体ですぐパッと手に入れられるんですね、それの「理論の動画性」についてという、特高に逮捕されたときに、コミンテルンも含めた、共産党の理論は正しくて揺るがないような、そ

ういうすべてを覆い尽くしてしまうような理論というような、完璧に還元論ですけど、そういう政治の主義に対しての徹底的な批判を上申書として書いているんですね。私は罪を犯しましたではなく、こういう間違いをしているということを、ある意味での自己批判だと思うんですが、それはその緩い理論ではなくて、どのように理論を捉えるか。理論と実践、という風に、「と」で分けてしまうのではなくて、理論的な行為、活動が、どのように実践的な意識の問題や認識のレベルのあいだにきちんと連関をもったのかということを考える必要があるだろうと思います。「フォイエルバッハ・テーゼ」の解釈などでもつねに問題になってくる、実践ということに深く関わってくることだと思います。

司会　ありがとうございました。時間が過ぎてはいるのですが、あまりにもここで終わってはもったいないので、もうビール飲みたいでしょうけれども、一〇分くらい、せっかくここで集まったので、フロアの方からご意見ご質問ありましたら、著者の二人に対してもあるいは報告者の方々に対しても、いかがでしょうか。
（以下省略して終了）

シンポジウム「今日の資本主義を批判するために――『マルクスと商品語』
20180630　補足引用（真島）

＊　下線・中略はすべて引用者。末尾のカッコ内は引用ページ

■主体としての商品／価値

01
[…]今日[…]グローバルにかつ大量に存在し運動している利子生み資本形態を取る架空資本（種々の株式や債券、またいわゆるデリヴァティヴなどの金融商品など）[…]（066　n49）

02
資本主義的生産様式が支配する諸社会においては、主体は他でもなく商品（〈商品－貨幣－資本〉という三形態への相互転化を遂げつつ運動するもの）でしかない[…]生きた人間たちそれ自身は決して主体ではない。それどころか、いかなる擬制的・架空的主体としても現れることはない（024）

03
資本は何よりも「増殖しつつある価値」である
　［マルクスからの引用］→　商品も貨幣も、ただ価値そのものの別々の存在様式としてのみ[…]機能する。価値は[…]一つの自動的な主体に、自分自身で運動しつつある主体に、転化する[…]価値はここでは一つの過程の主体になるのであって、この過程のなかで絶えず貨幣と商品とに形態を変換し[…]（271）

04
次々と姿態（使用価値としての姿態）を取り換えつつ運動する資本は、確かに価値の運動ではある。だがその場合も、資本はあくまで商品なのである（403）

■世界批判のためのテクスト批判

05
資本主義的生産様式が支配する社会における価値は商品価値以外になく、この価値に従来の一切の価値が集約され、それゆえ商品価値は単なる諸価値の一つにすぎないのではないということ、しかもそれは徹底して転倒したものであること、このことがマルクスの念頭にある。それゆえ商品価値に対する批判が根源的な価値批判であり、しかも新たな価値を創造する運動への一条件でもあるということである[…]（128　n37）

06
[…]「どのようにして、なぜ、何によって商品は貨幣であるのか」、つまり「すべての商品の貨幣存在」を解くところに、価値形態論の課題がある[…](140)

07
「すべての商品に貨幣存在が内包されることを明らかにするには？」と、その問いの設定に内在する答えとを、確固として前景化させ復権させること－これこそがわれわれが本書で取り組んだ問題の中核に存している[…](013)

08
商品は自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉[…]この〈忘却〉の行き着く究極の在り様が、商品化した資本、すなわち利子生み資本形態をとる資本、すなわち、種々の架空資本である[…]こうしたところにまで突き進む端緒が、単純な価値形態においても、その等価形態にはっきりと現れ出ている(170)

■「価値」と「価値形態」

09
交換価値ではなく、価値という決して感性的には捉えられない、極度に抽象的で純粋に社会的な価値において諸商品は等置されている、と喝破したことこそが、マルクスにとっての根源的価値批判であった[…](257)

10
人々は労働生産物を商品として等置し、そのことによってそれらの労働生産物に対象化された労働をたんなる抽象的な人間労働として等置する。そうすることで人々は、諸商品を価値として等置しているのである。しかもそのことによって人々は、その等置を価値としての等置と意識することなく、商品に対象化された抽象的人間労働の量にもとづいて直ちに交換価値におけるものと諒解するのである(090-091)

11
異種の二商品の等置が、交換価値におけるものでもなく、また労働生産物という属性におけるものでもなく、価値という純粋に社会的で極限的に抽象的なものにおけるものであることを理解することはとても難しい[…]かのエンゲルスでさえ、少なくとも『資本論』初版刊行時ではその点をきちんと理解してはいなかった[…]ほぼすべての人は、交換価値あるいは価格が等しいもの同士の等置、と答えるであろう[…]では交換価値とは一体何か、という問いに至ることは普通はない[…]マルクスはこの問を立て、しかもそれに対象化された労働でもって解答するスミスやリカードゥ

などと違って、価値としたのである。これは本当に画期的なことであった(267 n6)

12
[…]商品論の諸概念－価値、価値の実体(＝商品に表された抽象的人間労働)、価値の形態たる交換価値、価値を形成する労働等－を人間語によって、分析的に定立すること[…]商品語で語られる内容[…]を、人間語によって〈翻訳し・叙述し・注釈する〉こと[…](073)

13
価値、それは躓きの石なのである(259)

14
ドイツ語初版から第二版への「移行」＝「改訂」において、叙述の卑俗化が施され、論理の後退が起きている[…1879年末から80年初頭にかけて書いた批判的評注のなかで]マルクスは、ドイツ語第二版による初版の書き換えが叙述上の混乱をきたしていることを自己暴露している(014-015)

15
一般的等価形態に位置する一般的等価物たる一商品が、貨幣商品としての金に転化・固定化する事態[…]は、純粋な論理によって解き得ない[…それにもかかわらず、第二版と初版付録は…]最後の形態である形態Ⅳを貨幣形態にすることによって、形態Ⅰ(単純な価値形態)から形態Ⅳ(貨幣形態)へと至る価値形態の発展という筋道が敷かれたことになった[…]その結果として、価値形態論全体が、貨幣の必然性とその生成を解くという究極目標(テロス)をもつものとなった(138-139)

16
第二版への書き換えの必要性をマルクスに迫った、根本的な理由がある[…]価値はあくまで交換価値の「背後」に「隠れている」[…]人々が、価値それ自体ではなく、そのたんなる表現様式(現象形態)である交換価値において、商品社会を思惟し・認識し・行動していることーこの現実を、まずは人間語によって暴き出すことが、マルクスの課題であった。であるならば、初版における叙述のように、仮言的にではあれ、価値をあらかじめ措いてしまうことは、剔抉すべき現実の深奥を逆に隠蔽することになってしまう。だからこそマルクスは、初版冒頭商品論の出だし部分の書き換えを不可避なものと考えたのだ[…]だがしかし、マルクスはこの書き換えを最後まで徹底して行わなかった[…]徹底した書き換えを完遂できなかった[…](088-089)

■「価値」と「価値実体」

17
[…]諸商品の交換関係としての等置関係を表わす等式が、何における等式であるのかということと、その等式が成り立つ物的な根拠は一体何であるのかということとを明確に区分し示すこと[…](106)

18
価値自体は物的なものでは決してない。それは極度に抽象的であり、純粋に社会的なものである[…]価値それ自体に量的契機が内在しないがゆえに、価値がその大きさを社会的に規定され得るようにならなければいけない。そのために、外的に量を規定するもの、すなわち価値実体が必要になるのである(088)

19
[…等置された]二商品はそれら双方とは異なる「第三のもの」に還元されなければならないとされる。この「第三のもの」が[…]「価値の実体」である、「二商品に表される抽象的人間労働」であることは明らかである(091)

20
[…]労働の具体性・有用性が一切捨象されることによって、限界にまで剥がれた〈質〉でしかない抽象的人間労働[…]具体的な量的規定性を剥ぎとられて量一般になり、その究極的な〈質〉において捉えられた、この「抽象的人間労働」なるもの[…](112-113)

21
第二版とフランス語版では価値導出の論理過程がいささか錯綜したものとならざるを得ない[…]つまり、異種の二商品の等置から価値を導き出したいのだが、それをストレートに行なうことができないことがわかる。価値より前に労働が導かれなければならないのだ。二商品の等置・等式は価値におけるそれである。このことを明らかにしなければならないのだが、そのために等置・等式がそもそも成り立つ根拠、等値・等式が可能となる物的な根拠が先に剔抉されなければならないことになるわけだ。初版でのように、価値を前提的にあるいは仮言的に措くことを避け、価値を分析的に導出することを目指したがゆえに、叙述上の困難が生じたわけである。〈共通なもの〉＝価値と〈第三のもの〉＝労働(抽象的人間労働)とが混同される危険性がきわめて大きくなるからであり、実際に従来、この部分に対する『資本論』解釈のほとんどすべてがこの混同に陥っているのである(093-094)

22
[…]この接続詞「したがって」を無視してしまう多くの論者は、「共通のもの」と「第三のもの」とを混同するか、あるいは同一視している。ひいては、「共通な(の)第三者」なる、マルクスが『資本論』

では使用していない用語を平然と使うことになる[…]だが、「共通な第三者」という概念は論理的に問題がある[…]あくまで第三者という以上、それは二つの商品そのものとは異なるものである(092-093)

23
商品に表されている抽象的人間労働を、「実体」というこれまでの長い哲学史上の用語を用いて、価値の実体として概念規定したことの意義[…](175)

24
マルクスは『聖家族』において、ヘーゲルの「実体＝主体」概念を批判していた[…しかし]『資本論』において〈価値の実体〉という概念を措定した。なぜなら、哲学者たちの頭の中に生え育った「実体」というものが、まさしく商品生産社会においては、貨幣という形で現実に現れ出ているからである。つまり、人々の無意識的な社会的行為によって、社会的実体たる価値実体が、日々定立されているからであった[…]思惟の中での転倒ではない、現実の社会における完全な転倒[…]マルクスは〈実体〉という用語を使うことによって、まさしく〈商品－価値－価値実体〉への根源的批判を遂行しようとした[…](240-241)

■「商品語」と商品語の〈場〉

25
[…]冒頭商品論における諸商品の等置関係を実際の交換がなされるものと考えるような種々の混乱[…](148)

26
冒頭商品論[…]では、実際の交換、現実の交換過程は問題になってはいない[…]たんに諸商品は、等置関係に置かれ得るものとして考えられている。交換ではなく等置と考えた方が厳密であり精確である[…]冒頭商品論は、貨幣を抜きにした抽象的な〈場〉の世界として考えられなければならない[…](198)

27
[…]価値形態論には商品所有者とその欲望が不可欠だとする宇野弘蔵らによる議論や、価値形態論に商品交換の当事主体が不可欠であるとする廣松渉らの議論は、まったく見当違いなものでしかない(145)

28

〈商品－商品世界〉の分析と把握は、人間語によって商品語の〈場〉とわたり合うことである。この点から『資本論』冒頭商品論の出だし部分(第二版で言えば、第1節およびその補節としてある第2節)[…でマルクスが論ずる過程]は徹底して人間語による論理的・分析的世界のものである。これに対して価値形態論および商品の物神性論の部分(第二版で言えば、第3節およびその補節としての第4節)においては一転して商品語の〈場〉を相手とする。諸商品自体の運動と関係において商品語で「語られる」内容をマルクスは「聴き取り」、それを人間語に「翻訳」し「注釈を加える」[…](025-026)

29

[…]マルクスが言う「商品語 *Waarensprache*」(現代表記では *Warensprache*)に真正面から取り組んでこなかったこと[…]従来、どれほど誠実・真摯な論者であっても、およそ「商品語」を一つの概念ではなく、たんなる比喩としてしか捉えてはこなかったのである(021)

30

商品は[…]過程の中で、主体として自ら「判断し推論する」ものである。そうである以上、商品が自ら「言語」をもち、商品相互の「意思疎通」をはかっていると考えることは、荒唐無稽ではなくむしろ自然である[…]だがもちろん、その「言語」＝商品語は、あくまで人間語とは決定的に違っている(025)

31

[…諸商品が]自らの貨幣名によってぺちゃくちゃ口にする〈場〉[…]は、構造的に創発された無数の力が行き交う＝関係する〈とき・ところ〉であり、物理学のそれと同様に受け取ってよい(024)

32

周知のように、場の概念は電磁気学において本格的に定式化されるが、人間語の世界の固有性である〈可算有限性－分節化〉からすると、実に理解しづらいものである(031 n8)

33

そもそも商品語に語や句それらの連鎖や、また節や文章といった分節化された・可算化されたもの・諸範疇を考えるいわれはまったくない。語や句などといったものを想定する人間語の世界の呪縛から自由でなければならない[…]取り敢えず商品語の〈場〉というものを措き、その〈場〉の固有の運動として、あるいはその〈場〉の〈励起〉として商品語を捉える必要がある[…その場]には〈意識－無意識〉からはじまる人間精神の特有のエネルギーが渦巻き・横溢している[…](058)

34

[…]主体である商品という諸物象の、複雑な運動と諸関係そのものとしてある商品語の〈場〉は、

だから人間語の世界の諸限界を超え出ていると考えられる。「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」とマルクスが言った商品語の〈場〉は、決して人間語の世界のように線形ではなく可算ともいえない。「無限」に多重多様な関係のうちに「同時」にひとしく諸事象が生じ、それが示される[…](056)

35

商品から、使用価値を捨象すれば、抽象的人間労働が得られる。つまり商品を労働に還元するわけである。その上でマルクスの論は、再び、労働生産物である商品に立ち戻る。すると商品は、かの還元で得られた抽象的人間労働の凝固物として、価値である[…]人間語による叙述過程は、このような序列でしかあり得ない。人間語の世界の線形性が、思考の論理的過程およびその叙述性に、時間順序＝前後関係を絶対的に要請するためである。だが[…]商品語の〈場〉は、その範囲を超えて動いている(116-117)

36

[…抽象的人間労働の次元をいったん経由したうえで価値をたぐり出すという「廻り道」]の構造を、人間語によって論理的時間順序に従い叙述するのには、そもそも無理がある(155)

37

リンネル価値が当のリンネル物体において反射されるなどということはあり得ない。なぜならば、価値は純粋に社会的であり、リンネル物体はどこまでいってもリンネル物体でありつづけるしかないからである。社会性は社会関係においてあるのであり、社会関係においてしか現れない。かくして労働生産物リンネルは、自らが価値物、すなわち商品であることを示すために、自らと異なる何らかの商品を自分に等置することが必要であったのである(154)

■幾重もの「外」をまえに

38

商品語の〈場〉によって人間語の世界が、包囲され浸食され包摂され食い破られ断片化され、言葉としての〈力〉を殺がれ、「つぶやき」や独り言にされ、更には沈黙を強いられ、いたるところで無効化されている現実を止揚する条件、すなわち、人間語の世界をラディカルな(＝根源的な)批判力をもったものとして、まったく新しく創り出す条件を根源から探ること[…]それを一言でいえば、文字通り人間そのものを、全面的に「取り戻す」、すなわち創出することである(265)

39

『資本論』は、商品とは一体何であるのかを問いそれを解き明かすことを通じて、商品語の〈場〉のこの特質、つまり人間語の世界を超え出た水準をもつものであることを明らかにすると共に、そ

れが超克され得ることを示したのではないだろうか[…]この類的存在としての人間が[…]まったく新たな類としての在り様を創造しうるものであること[…](059)

40

今日では、資本主義的生産様式が支配する社会の富は、商品の集積から架空資本の集積、つまり種々様々の債券・証券・いわゆる金融(派生)商品等の集積、端的に言って負債の集積へと転化するまでにいたっている[…]〈いま・ここ〉において、ひたすら負債を作り出し積み上げ、それによって〈未来〉を喰らい尽くそうとしているのである。いまや資本主義は、〈いま・ここ〉の生産と労働を、それゆえ人間と人間社会を不要とし否定しようとする地点にまで至っているのである(264)

<書評>井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』(社会評論社2017年)

「商品の反ラプソディックな実在論とラプソディックな革命論」

友常勉

(友常勉『夢と爆弾　サバルタンの表現と闘争』航思社2019年所収を一部加筆)

実在論

マルクスは価値形態論において、商品の価値が展開する様態を、“ひとたたきでいくつもの蠅を打つリンネル”という「商品語」でいいあらわしている[(1)]。商品Aの出現は無数の商品の一挙的同時的な出現を意味するというのである。こうした「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」ような商品化を、『マルクスと商品語』の著者たちは「一挙的で多層的・多時間的な」遂行といいかえている。さらにこの過程は、生産物同士の直接的・非媒介的交換可能性(およびそれと間接的・媒介的交換可能性との不可分の対関係)という交換関係としても説明される。

マルクス『資本論』初版本に即してその論証を再構成し、問題のありかを再措定することで、価値形態論の争点を再現した井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』を論じるにあたって、本稿が焦点をあてたいのは、価値論が要請するこの特徴的なアプローチであり、それを言語化するために著者たちが巧みに案出した表現である。

ところで商品および価値という実在性を把握するために、抽象的な概念規定を重ねることで遂行されたのが『資本論』の価値形態論であるが、その抽象化の次元そのものが商品あるいは価値という実在に内在的なのであった。経験的実在性と概念的抽象化との関係、あるいは経験と概念という関係からいえば、こうした把握はカントからヘーゲルへの移行を正当に継承したものである。マルクス・ガブリエルとスラヴォイ・ジジェクはこのことを次のように整理している。

> ヘーゲルの「具体的普遍」が無限であるのは、それが「抽象」を自らの内在的な構成要素として具体的な実在性そのもののうちに含んでいるからである。ヘーゲルによれば、還元不能な多様な性質を備えた、具体的な経験的実在性の豊かさから遠ざかる[i]こととして〔抽象を〕理解する常識経験論者の「抽象」概念を捨て去ることが[ii]、哲学が抽象に対して行う第一歩である。〔中略〕そうした「抽象」のプロセスがいかに実在性そのものに内在的かということに我々が気付く時、真の哲学的思考が始まる。経験的実在性とその「抽象的な」概念規定との間の緊張関係は実在性に内在したものであって、物そのものの性質なのだ。この点に弁証法的思考の反唯物論的なアクセントがある(ちょうど、商品の価値という抽象が商品の「客観的」構成要素である、というマルクスの「経済学批判」の基本的洞察のように)。(Gabriel- Žižek,

(1) MEGA II/5,S.28――本稿では、『マルクスと商品語』の著者たちにしたがって、マルクスからの引用は現在刊行中のMarx Engeles Gesamtausgabeから、著者たちの訳文にもとづいておこない、特にことわりがないかぎり、マルクスからの引用は本文中の頁数とMEGAの頁数をあわせて表記することにする。なおMEGA II/5,S.28は同全集第II部第5巻、Seite28を指す。

〔p. 10、邦訳、29-30頁〕)

「具体的普遍」すなわち経験的実在は無限であり、分析的思惟とその概念ネットワークによってその全体性をとらえるのは不可能である。このことはヘーゲルにおいて露呈していた事態であった。したがって『マルクスと商品語』の達成点をドイツ観念論――とそのポスト・カント的な実在論における読み――にそくして理解することは可能である。実在論の今日的転回のうちに、本書の成果を位置付けてみたい。これが本稿が意図することのひとつである。

本稿が意図する第二のことは、『マルクスと商品語』の論証から飛躍することを承知で、商品の分析と並行して、マルクスがすすめていた現実社会の革命の条件をめぐるエピステーメーをひきあわせて考えてみたいということである。生産物同士が、直接的・非媒介的にかかわりつつ、価値という抽象化を内在的＝実在的に実現していくこの事態は、価値化という関係以外の在り様が存在しないということである。ここで参照してみたいのは、カントが『判断力批判』でしめした、美学的判断の成立における、自然の合目的性の概念と認識能力の概念とが媒介される中間領域における「認識能力の戯れ」＝ラプソディーである(Kant, 2009:LⅦ)。直接的・非媒介的な交換可能性とは、そうしたラプソディックな余地がまったく存在しない反ラプソディックな関係である。他方、ラプソディックな把握ということからいえば、ケヴィン・アンダーソン『周縁のマルクス』においてなされたマルクスの読書ノートの検証が重要である。マルクスの1879-82年のいわゆる「コヴァレフスキー・ノート」はインド史における生産の共同体的形態に注目しつつ、その関心をアルジェリア、ラテンアメリカに拡げていた。その共同体的形態の持続性への関心は、同時期のロシアに関する晩年の著作に結実していった。よく知られている1881年3月にロシアのヴェラ・ザスーリチからの手紙のために用意された回答において、マルクスは「アルカイックなものと近代的なものの新たな総合」(Anderson, 2010:230〔339頁〕)と、革命の条件としての「孤立性の克服」とを主張していた(Ibid:233〔343頁〕)。すでにマルクスは、1869-70年に西洋の労働者階級は非西洋社会のナショナルな革命と結合すべきことを、アイルランド問題に即して言及していたが、それは北米合州国における奴隷制と人種差別に対する闘争と労働運動との関係への指摘と同様の理論的立場から発していた(『資本論』第一巻)。1840年代のマルクスは西洋的一元的な発展史観の影響下にあったが、『資本論』の成立と軌を一にして、その立場を大きく変えていた。その方法論を、私は「弁証法的理論の発展」――ケヴィン・アンダーソンのように――とするのではなく、ラプソディックな実在論のエピステーメーとして理解してみたいと思うのである。すなわちここでは、商品語の世界の分析を踏まえつつ、同時に、それとはまったく対照的な実在論の展開が構想されていたのではないかと考えるのである。

なお『マルクスと商品語』後半では前半での価値形態論の検討を踏まえて、利子生み資本から架空資本、そしてイスラム金融まで目配りした原理的な検討が行われている。ただし本稿ではあくまで価値形態論における論証にかぎって論じていることを断っておきたい。それは著者たちの見事な論証を限られた紙数でできるだけ忠実に伝えたいと考えたからである。

ところでマルクス価値形態論を、私の部落史研究にかかわらせて考えておきたいことがある。日本の中世非人研究の論点のひとつとして、非人と河原者(清目、細工、穢多)との区別がある(細川、1994:105-128頁)。これは南アジアのダリト身分の皮革労働における類似の様態の理解にもかかわっている(関根1995)。このことは、中世の贈与経済と商品経済の世界(桜井2017)において、斃牛馬処理というキヨメ慣行(贈与経済の一種)から、出来高で数量化され、生産物が商品として交換される皮革生産が自立し、その斃牛馬処理のテリトリーを指す旦那場の所有権が設定されてくる過程をどう理解するかという問いとして、再措定できる。先回りしてこの問いに対する現時点の見通しを述べておくならば、ケガレ-キヨメの習俗的慣行は贈与経済の一種として理解することが可能であるが、この贈与経済は身分関係・権力関係を原理的に規定し、さらに社会的な流通過程をともなっていた。しかも皮革生産物だけでなく、斃牛馬処理のテリトリーとしての旦那場所有も商品化されていた(桜井1996)。桜井英治はこうした中世日本における所有権の普及と退潮の要因を、「神々や文書の権威」あるいは中世文書主義に求めているが、それは「価値化・商品化」をも規定していたのではないだろうか(同上:三六九頁)。中世日本においては、「神々や文書の権威」は、労働生産物の属性としての抽象的人間労働より以上の規定力をもって、労働生産物の等置や交換を支配している。商品制生産様式が支配的ではない前近代社会において、この場合の「価値化・商品化」は部分的な現象にとどまる。考えてみたいのは、こうした前近代的で異種的な複数の生産様式が結合している場合の「価値」の内容である。この問いは、「アルカイックなものと近代的なものの新たな総合」がどのように可能かという問いにつながっている。被差別部落の場合は、その身分闘争と階級闘争との関係がどのように実現されるのかという問いとなる。この総合において、マルクスの価値論が確立した価値批判、商品批判という視点は、どのように貫かれるのだろうか。

マルクス価値論

さて、価値形態論における〈価値〉の歴史的かつ実在的な特異性を導出するにあたって、まず問題になるのは、『資本論』冒頭の商品論出だしの部分に、三つのヴァリアントがあることである。すなわち、初版(ドイツ語、1867年)、初版付録、同第二版(ドイツ語、1872年)である。このヴァリアントが存在すること自体が商品論、価値形態論における多くの誤読の理由でもあった。その相違をときほぐすために費やされている著者たちの細心の読みは称賛に価する。

それらヴァリアントのうち、著者たちが論理的優位性を認めるのは初版本文である。そこから引用しよう。以下の引用中で留意しなければならないのは、「同じ価値が二つの違った物のうちに〔中略〕存在するということである」という文言と、これを「したがって」という接続詞で受けて続けて言われる、「両方ともある一つの第三のものに等しい」という文言である。ここで「同じ価値」と「第三のもの」が指している対象は異なる。

> あらためて二つの商品、たとえば、小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、ある与えられた量の小麦がどれだけの量の鉄に等値される、という一つの等式で表わすことができる。たとえば、1クォーターの小麦＝aツェントナーの

> 鉄、というように。この等式は何を意味しているのであろうか？同じ価値が二つの違った物のうちに、すなわち１クォーターの小麦のなかにもａツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。したがって、両方ともある一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方のものでもなければ他方のものでもないのである（初版本文、MEGA Ⅱ/5, S. 18-19）。

等置されている二商品はそれらに表わされた抽象的人間労働という物的なものに還元されるが、抽象的な価値に「還元されるわけはない」（108頁）。ここで著者たちは強調する――「価値には量的契機は含まれない」。また、「共通なもの」と「第三のもの」とを抽象的人間労働だと考えるのも、もうひとつの誤読である。この誤読では、価値形態論の等式が「価値におけるものではなく、〔…〕労働生産物であるという属性における等式になってしまう」。これでは商品という媒介を経ずに交換されることになり、労働生産物は商品に転化する必要がなくなる。

結論からいえば「同じ価値」は「価値」を指す。それは商品価値などといいかえられはしないし、「交換価値」に代替されるものではもちろんない。そして「第三のもの」は「価値の実態」としての「抽象的人間労働」である。価値形態論をめぐる多くの誤読や混乱をこうして一蹴しつつ、マルクスの等式が「価値」についての歴史的に決定的な達成であることが明快に述べられる。

> （リカードゥに対してマルクスは）価値の大きさはつねに変化し、あくまで相対的なものであり諸交換価値としてあらわれる。だが、価値そのものは相対的な社会的関係なのではない。労働（厳密に言えば、抽象化された人間労働一般）が対象化されているかぎりで、そうした労働の凝固体であるかぎりで、諸労働生産物がもつ社会的属性が価値である――このように、マルクスは〈リカードゥーベイリー〉を批判したのである。換言すれば、量的契機を内的にもたない価値は、相対的な社会関係ではなく、社会的関係そのもの、つまり絶対的な社会的関係だ、と言い切ったのである（108頁、強調は引用者）。

ここでは「価値」は、「善悪」などの次元で議論されてきた観念としての社会的関係を総括し、その観念的系譜を劇的に転換したものとして措定される。それは抽象的人間労働という社会的実体を根拠とした社会関係である。そして社会的関係そのもののなかにしか等置されるものを有さない、「絶対的な社会的関係」である。したがってそれをあらわすことができるのは等式による表現形式しかない。それはまた商品語という表現形式の内在的な「理路」によって可能性となる。こうして、抽象的なものが社会的実体という具体的実在性をもって存在すること、それはほかの非実在的な次元には還元できないし、置換もできない。具体性を排除するという意味での「抽象概念」は――ヘーゲルにならって――ここで捨て去られるのである。価値論においては抽象的なものとは具体的なものからの抽象として理解されてはならないし、具体的なものの属性でもない。ここには抽象的一般的なものと具体的なものとの関係の「転倒」があり、商品の価値形態論の理解を困難にする事態がある。マルクスはいう。

> 価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態として認められるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである。…この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なものが具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする(159頁、MEGA Ⅱ /5, S. 31-32)。

「人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである」ということ、すなわち「感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態」となるということである。それはさらに次のように条件づけられる。「抽象的一般的なものが具体的なものの属性として認められるのではない」。すなわち、“属性〔attribute〕ではない”ということは、抽象的に抽出された性質や特徴の次元を問題にしているのではないということである。また、価値形態論における抽象的人間労働が、具体的労働の疎外態であるといっているのではない。あるいは「弁証法的発展」の展開過程としての「抽象から具体へ」ということがいわれているのでもない。著者たちはマルクスのこの言明を受けて、こうした抽象的なものと具体的なものとの関係を、次のように補足する。「具体的なものを抽象化していくのが人間の分析的思惟の自然な理路」(180頁)である以上、分析的思惟によっては把捉されず、受け入れも困難な事態となるのだ、と。商品語の場を記述することは、この困難を軽減しはしないとしても、それは事態に即した記述なのである。

以上は商品の交換関係を表わす等式についての理論的条件であった。価値形態論はこの理論的条件を踏襲してすすめられていく。

価値形態論

初版本文の価値形態Ⅲの箇所でマルクスは、形態ⅠからⅢまでを次のように総括している。

> われわれの現在の立場においては一般的な等価物はまだ骨化されてはいない。どのようにして実際にリンネルは一般的な等価物に転化させられたのであろうか？それは、リンネルが自分の価値をまず第一に一つの個別的な商品において示し(形態Ⅰ)、次にはすべての他の商品において順次に相対的に示し(形態Ⅱ)、こうして逆関係的にすべての他の商品がリ

ンネルにおいて自分たちの価値を総体的に示した(形態Ⅲ)、ということによってである。(176頁、MEGA Ⅱ/5, S. 42)

これをふまえて形態Ⅳがある。初版本文の論理にしたがって、次のように著者たちは結論づける。それは三つのヴァリアントがもたらしてきた論争にひとつの決着をもたらすことになる結論である。「形態Ⅱおよび形態Ⅲに一例としてとられたリンネルの位置に任意の商品が座り得ることを示すものが、形態Ⅳなのである」(200頁)。この立場からすれば、形態Ⅲから形態Ⅳへの移行には本質的な変化はない。初版本文の理論的優位性はそのように確定される。著者たちはいう。

何らかの一労働生産物は、それと異なる種類の労働生産物たる商品との交換関係(価値関係である等値関係)に入ることによって、現実的に商品となる。つまり、他の異種の商品を等価物として(等価形態として)自分に等値し、自らはこの関係の中で相対的価値形態を取ることによって、自らを現実的に商品として示すのである。したがって、価値形態論の果たすべき課題からすれば、あくまで相対的価値形態の方から見て、まずは論理的にあり得るすべての価値形態について、商品形態としての社会性の水準の低いものから高いものへと見ていくことが求められるのである。それゆえ、この理路から必然的に導かれる叙述の結実は、一般的価値形態――純論理的に措定した場合の最高の価値形態――における一般的等価物に、あらゆる商品が位置できることを示すことである。この理論的課題の解決が、「すべての商品の貨幣存在」を解くことであることは言うまでもない(138頁)。

商品ははじめから商品として表れているわけではない(それがありえるのは貨幣だけである)。商品はあくまで「それと異なる種類の労働生産物たる商品との交換関係(価値関係である等値関係)に入ることによって」商品となる。他の異種の商品を自らの等価形態とし、それによって自らは相対的価値形態を取ることで商品となる。この交換関係において、「社会性の低い水準から高いものへ」と見ていくことで、あらゆる商品が一般的価値形態として、一般的価値物として位置できることが示される。形態Ⅳの意味は、この一般的価値形態に特定の商品が座すことを示すことにある。これが理論的な道筋である。それゆえこの道筋を維持している初版本文の論理的優位性を評価しつつ、同時に、形態Ⅳをあたかも「新たな形態」として貨幣を論じる第二版以降の論理的損失を著者たちは次のように指摘する。

初版本文は相対的価値形態から一貫して見たものとなっており、かつまた、「形態Ⅳ」として、一般的価値形態における一般的等価物の位置に、任意の商品が位置しうること」、そしてまた価値形態のなかで貨幣形態について解いていないことも、初版本文の価値形態論が、他の二つのテキストに対して、論理的に優位性をもっていることをはっきりと示している。(138頁)

初版本文では、形態Ⅰから形態Ⅱ、形態Ⅲと、質の異なる三つの形態が順に論じられている。

> すなわち、社会性の水準の低い方から高い方へと取り上げられている。その上で、形態ⅡおよびⅢに関して補完的に、形態Ⅳなるものが取り上げられる。ただしこの形態Ⅳは、それまでの三つの形態と同列に扱うわけにはいかないものである。なぜならば、形態ⅡおよびⅢにおける議論のうちに、論理的には形態Ⅳの内容がすでに含まれているからである。形態Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと質の異なる「新たな形態」として、形態Ⅳがあるわけではない。マルクスは、強調のために形態Ⅳとして、敢えて問題にしたのである。(140頁)。

『資本論』の価値形態論をめぐる論争と、商品制社会と貨幣の揚棄までふくめた革命戦略の政治プログラムに直結するこの論点はきわめて重大である。ただしこの小論では、紙数の都合から、これ以上は言及しないでおく。いかにして労働生産物が貨幣になるか、「すべての商品の貨幣存在」を解くところに価値形態論の課題があり、その課題と解決はここで示された。形態Ⅳは「新たな形態」なのではない。

ところで初版本文の価値形態論が論理的にみて正しい価値形態論であるにもかかわらず、論理的な破綻を呈する初版付録や第二版を、マルクスはなぜ書いたのか。著者たちの答えは以下のとおりである。クーゲルマンはマルクスに価値形態論の平易化を求め、エンゲルスは「歴史過程」的な価値形態論への「理解」にもとづいた忠告をマルクスに送っていた。とりわけ「すべての商品の貨幣存在」を解くこと、「歴史的な方法で貨幣形成の必然性やそのさいに現われる過程を示す」ことが求められた(223頁)。いわばエンゲルスへの譲歩である。それによって第二版は商品語をより精確に、より深く「聞き取り」、緻密・精確な叙述を可能にしたところがある。ただし、こうした要請や忠告に対するマルクスの対応は、それは平易化を意味してはいないにせよ、価値形態論全体を歴史的発展過程の叙述へと後退させた。それは論理的な後退である。

商品語

ところで筆者たちは、価値形態論における価値の導出過程の困難性とマルクスの「理路」を措定するために、そして労働生産物が商品になる際の交換の形式、その固有の等置式を示すために、集合論を参照している(マルクスの論証を再措定するこの箇所は、本書の白眉である)。そのような手続きが必要となるのは、「人間語の世界」が以下のような特徴を有していることにもとづく。

> 数学世界におけるどのような公理系でも、定義はまずはimplicitに措かれる。その後の議論全体によって、それがexplicitなものとして確定するのである。〔中略〕これは人間語の世界が論理の形式において完全なものではない、つまり論理的に閉じたものではないことを示している。〔中略〕人間語の世界は対象世界(―自然、社会)に向かって〈口〉を開き、それによって対象世界の非可算無限性を呼吸するものである。そのことを、人間の論理がもつ〈開かれ〉は表現しているのである(142頁)。

ジジェクにいわせれば、〈現実界〉それ自体の内在的な「隙間、裂け目、不整合、「歪み」」を呈する

ところに、人間語の世界の〈開かれ〉がある、ということになる。だがジジェクあるいはジジェクが参照するヘーゲル的な自己反省の解読はここでは必要がない(Žižek, 2009:130-131、二四九頁)。ジジェクのような方向に進む代わりに、著者たちはマルクスの意図を敷衍して、数学的集合論を選ぶ。

ここで著者たちが、マルクスの時代にはまだ展開されていなかった集合論を用いる理由は、非可算無限性を有する対象世界を記述しようとする人間語によって、商品の定義をimplicitに措定しようとしたマルクスの意図を理解する補助線を描くためである。それは、無限大に生じる交換の様式のなかから、いかに商品が商品となるかの等置式を、マルクスはどう導出したか――それが三形態の価値形態論である――を理解するために必要なのである。著者たちの議論を見よう。

> 集合Wから任意の要素aを取る。要素aは自分が商品であることを示すために、自分と異なる任意の要素bを自分に等置する。量の規定性を適切に配慮すれば、等置式:a=bができる。〔中略〕ここでは、等置式が作られた在り方からして、式の両項は交換されえない。つまり、ここでの等置式は数学の等式とは、まったく異なる(一四五頁)。

この等置式は、「交換可能でないa=b」(形態Ⅰ)、「相対的価値形態の位置にただ一つの商品が座り、その商品と異なる種類の商品すべてが等価形態に位置する形態」(形態Ⅱ)、「各等置式において左右両項を交換したもの」「形態Ⅱに対応する集合の各要素である集合において、等置関係をすべて逆にした(n-1)個の等置式を要素として含むもの」(形態Ⅲ)(一四六頁)、である。集合論による検討で、三つの価値形態の検討から得られる帰結もまた、明快である。「価値形態を規定する契機は、相対的価値形態と等価形態という二つであるから、価値形態としては以上の三つ以外にはない。価値の表現、価値形態としてはこの三つが必要かつ十分なものである。〔…〕繰り返すが、貨幣形態がここに登場することは決してありえない」(一四七頁)。こうして初版本文の論理的優位性は担保されるのである。

ところで著者たちによって記述され、再措定されている価値形態論の枠組みを、商品の所有者を介在させた実際の交換と混同してはならない。それゆえ宇野弘蔵や廣松渉の議論は見当違いなものである(もちろんこうした混同を包括しようと思えば、ジジェクの〈現実界〉が必要となる)。しかもまた、三つの価値形態論は、転移や移行、発展ではない。ましてや「弁証法的発展」――これまで通俗的に理解されてきたような意味での――でもない。

集合論による価値形態論の理解はあくまで補助であるが、商品語にそくしてこれを理解することは、よりマルクスの叙述にそくしてこの事態を再構成することになる。

マルクスの比喩「リンネルは、ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」を受けて、著者たちは以下のように展開する。

> これこそまさしく、商品語の〈場〉の特有の在り様だ。言い換えれば、商品語の〈場〉は、人間語の世界のような線形時空をなしているはいないのである。一挙に多くのことが(たんに可

> 算的に多いということだけではなく、非可算的に、と言ってもよい)、語られ実現される。〔…〕さらに言えば、商品語の〈場〉においては、分節化が行われない。〔…〕価値関係という関係そのものが一挙に多くのことを語るということは、いわば無時間的に、あるいは多層的な時間が凝縮された系にそなわる〈理論的な一瞬〉において、商品語が溢れかえるわけである。つまり、人間語の世界では線形な論理的時間順序に関わるところを、無時間的もしくは多層時間的に、相対的価値形態にある商品が自分にだけつうじる言葉を一斉にしゃべるのである。(一四九頁)。

この事態を、マルクスは他の商品との等置によって、自己自身に価値を関係させることで遂行していくリンネルのありようを通して記述する。参照しよう。

> リンネルは、ほかの商品を自分に価値として等置することによって、自分を価値としての自分自身に関係させる。リンネルは、自分を価値としての自分自身に関係させることによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する。リンネルは自分の価値の大きさ――そして価値の大きさは価値一般と量的に計られた価値との両方である――を上着で表現することによって、自分の価値存在に自分の直接的な定在とは区別される価値形態を与える。リンネルは、こうして自分を一つのそれ自身において分化したものとして示すことによって、自分をはじめて現実に商品――同時に価値でもある有用な物〔Ding〕――として示すのである(149-150頁、MEGA Ⅱ/5, S.28)。

著者たちがいうように、自分で価値であることを直接的に示すことができない商品は、「能動的に他の異種商品を自分に等置する」(同上)。この媒介関係を通して、つまり「能動が媒介をへて、受動に変わる」という複雑な論理を通して、商品であることが示される。
ところでここで急いで付け加えなければならないことがある。この等置式には、〈自然-社会的関係〉の二重性と、〈私的労働の社会化〉過程という、もうひとつの二重性が表現されているということである。

商品A(リンネル)が商品B(上着)を自分に等置することによって、商品Bをつくる具体的労働が、それと質的に異なる商品Aをつくる具体的労働と等置される。それによって、Bをつくる労働の具体的有用性・自然的規定性が抽象化されて、双方の労働に共通な質である人間労働に還元される。著者たちはこれを〈自然的規定性の抽象化〉過程と呼ぶ(155頁)。商品Bは、そのあるがままの現物形態において、抽象的人間労働が対象化された物Dingであることが、それによってまた商品Aも抽象化された人間労働の対象化であることが示される。それぞれは現物形態としては、つまりその使用価値としては異なる商品でありながら、等置式を構成する抽象的人間労働の凝固物であり価値、すなわち商品であることが示される。

この〈自然的－社会的〉関係の抽象化過程において著者たちが注意を促すのは、これらの現実の抽象化が、分析的思惟による抽象化ではないことである。抽象化は、商品Aが商品Bを自分に等置

するという「その現実そのもの」によって成し遂げられているのである。その等置はしかも、〈私的労働の社会化〉過程を成し遂げる等置でもあるのである。

現実の抽象化過程とは、具体的なものが抽象的なものの実現過程だということである。この抽象化過程が分析的思惟にとって認識困難であることは、マルクスによって再三強調されていたことであった。ふたたびマルクスを参照する。

> われわれは、ここにおいて、価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の噴出点に立っているのである。(商品の価値を使用価値から区別すること、あるいは抽象的人間労働と使用価値を形成する労働から区別することは比較的たやすい――引用者〔井上・崎山〕注)商品にたいする商品の関係においてのみ存在する価値形態の場合ではそうではない。使用価値または商品体はここでは一つの新しい役割を演ずるのである。それは商品価値の現象形態に、したがってそれ自身の反対物に、なるのである。それと同様に、使用価値のなかに含まれている具体的な有用労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間労働の単なる実現形態に、なる(一五八頁、MEGA Ⅱ/5, S. 31-32)。

先に「感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態」となるという「転倒」について言及した。この転倒としての価値表現である等価形態を理解することは、〈私的労働の社会化〉過程を理解するための重要な前提となる。ここでも、この事態は人間語によっては十全に把捉できない商品語の〈場〉で起きている。なぜなら、等価形態にある商品Bに表わされた私的労働がそのまま社会的労働として認められるということは、「一挙的に(というよりも精確には、無時間的あるいは多層時間的に)」実現されるからである。そして著者たちはこの認識困難な課題を解くために、『資本論』初版の誤訳問題からアプローチする。それは著者たちによるマルクス商品論の検討のなかでも、精妙で鋭利な分析のひとつである。

この誤訳問題は、等価形態にある商品が、直接的・非媒介的交換可能性の形態にあるという内実を含んでいる。「価値関係:〈商品A＝商品B〉については、「商品Aは自分に商品Bを等置する」と捉えるべきである」(161頁)。にもかかわらず、これまで流布してきた『資本論』の宮川実、長谷部文雄訳は「商品Aは自分を商品Bに等置する」と誤訳し、宇野弘蔵も同じ誤りを犯した。久留間鮫蔵はその誤りを指摘した。なぜ久留間の指摘は正しかったのか。それは、「自分を現実的に商品として示そうとする商品Aは、あくまで自分自身ではその目的を果たすことができない。したがって、商品Aは相対的価値形態の位置に座し、何らかの異種の商品Bを自分に等置し、それを自分の等価物とする」(同上)からである。

誤訳である「商品Aは自分を商品Bに等置する」に従うと、商品Aはすでに価値物であることを前提として、商品Bを価値物にすることになる。しかしこれは商品交換ではない。商品Aは商品Bに直接的交換可能性を与えるエージェントにはならない。著者たちは述べる。「商品交換では、あくまで等置される方が、等置されるというその受動性によって、この受動的な関係自体によって、相手との直接的・非媒介的な交換可能性を持つのである。この点の理解がポイントである」(163頁)。

商品A自体は直接的・非媒介的交換可能性をもっていない。あくまで商品Bと等しいとされるかぎりで、間接的・媒介的に交換可能性を持つ。そして、等置関係が生まれることで、商品Bが直接的・非媒介的交換可能性を持つのである。

しかもこのことが重要であるのは、それが貨幣の謎性にかかわるからでもある。著者たちは述べる。

> 等価物が等価物である限りでもつ、この直接的・非媒介的交換可能性という特質によって、完成された価値形態の決定的な交換可能性が、現勢化する。すなわち貨幣形態においては、貨幣以外のすべての商品は貨幣との等置によってはじめて、間接的・媒介的に交換可能性をもつのであり、貨幣は貨幣であることによって、つねに直接的交換可能性をもつことになるのである。ここに貨幣の秘密があり、神秘性が存する(同上)。

等価形態における直接的・非媒介的交換可能性と間接的・媒介的交換可能性は、同時にまた「対立的で不可分な対」である(一六五頁)。この関係性をマルクスは「一方の磁極の陽性が他方の磁極の陰性と不可分であるのと同じようなものだ」という比喩を用いて説明している。

次にしめすのは初版本文形態Ⅲの箇所である。

> 〔一般的価値形態における一般的等価形態にある〕ある一つの商品がすべての他の商品との直接的な交換可能性の形態をとっており、したがってまた直接的に社会的な形態をとっているのは、ただ、すべての他の商品がそのような形態をとっていないからであり、またそのかぎりにおいてのみのことなのである。言い換えれば、商品一般が、その直接的な形態はその使用価値の形態であって、その価値の形態ではないために、もともと、直接に交換されうる、すなわち社会的な、形態をとっていないからなのである。
>
> 一般的な直接的交換可能性の形態を見ても、それが一つの対立的な商品形態であって非直接的交換可能性の形態と不可分であることは、ちょうど一方の磁極の陽性が他方の磁極の陰性と不可分であるのと同じようなものだ、ということは、実際には決してわからない。(MEGA Ⅱ/5, S.40)

一般的等価物に表わされた私的労働は、等価形態において、直接的・非媒介的に、社会的な形態をとり、社会的労働として認められる。さらにこのことをマルクスは、等価形態の「対立的で不可分の対」をとおして、次のように述べている。

> 商品は、生来、一般的な交換可能性の直接的な形態を排除しているのであって、したがってまた一般的な等価形態をただ対立的にのみ発展させることができるのであるが、これと同じことは諸商品のなかに含まれている諸私的労働にも当てはまるのである。これらの私的労働は直接的には社会的でない労働なのだから、第一に、社会的な形態は、現実の有用な諸労働の諸現物形態とは違った、それらには無縁な、抽象的な形態であり、まだ第二に、すべ

ての種類の私的労働はその社会的な性格をただ対立的にのみ、すなわち、それらがすべて一つの除外的な種類の私的労働に、ここではリンネル織りに、等置されることによって、得るのである。これによってこの除外的な労働は抽象的な人間労働の直接的で一般的な現象形態となり、したがって直接的に社会的な形態における労働となるのである(166頁、MEGA Ⅱ/5,S.42)。

こうした〈自然的規定性の抽象化〉過程と〈私的労働の社会化〉過程は、商品Aが自らに商品Bを等置し、それによって商品Bは「具体的なものおよび私的なもの」自体が、そのままの姿態で「抽象的なものおよび社会的なもの」を表現することによって実現される。商品Bは貨幣の原-形態になるが、それはあたかも初めから抽象的・社会的なものとして映じる。ここに等価形態＝商品Bの謎性があらわれる。すなわち高度な社会性が自然的属性のようにとらえられるのである。こうした「商品という物象(Sache)が自然素材からなる物(Ding)に見えるわけである」(169頁)。この事態に際して、商品は商品語で語る。マルクスはこう述べる。

もし諸商品がものを言うことができるとすれば、こう言うであろう。われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物〔Dingen〕としてのわれわれにそなわっているものではない。だが、物としての〔dinglich〕われわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物としての交わりがそのことを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係し合うだけだ、と。(169頁、MEGA Ⅱ/5,S.50)

著者たちはこの商品の言葉をふまえて、「商品は自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉」ことに注意をあらためて促している(170頁)。それは商品化した資本である利子生み資本から、架空資本まで含まれる、「〈未来〉に抽象的な〈もの〉に転化することを当て込んだ、架空の運動でしかない」(同上)。それは同時に経験的実在の世界で内在的に実在化した運動である、ということも付け加える必要がある。商品Bあるいは貨幣はその受動的な様態によって自然的属性を備えているものとして映じ、しかし社会的な存在であることで、一見するとラプソディックな存在としてそこにある。だが商品化への方向性しか有さないという点で、反-ラプソディックな存在なのである。

おわりに

本稿冒頭で示した、1881年3月にロシアのヴェラ・ザスーリチからの手紙のために用意された回答に結実する、マルクスの「アルカイックなものと近代的なものの新たな総合」という立場は、一挙的多層的に単一の価値化・商品化をすすめていく商品の展開に対抗している。しかも、マルクスは、「孤立性の克服」をめざしつつ、非西洋と西洋、ナショナルなものと国際性、奴隷制と人種差別、民族主義と労働運動とが結合し、たとえそれ自身が革命的ではなくても、資本主義的近代と衝突することでラディカルな変化を遂げている社会闘争の歴史的なありように注目していた。商品論と価値論の深化は、そうした西洋中心主義でも近代化論でもないラプソディックな結合による革

命論ーーそこでは所有と生産の分離と、後者およびそれを担う伝統的紐帯に力点が置かれていたことも忘れるべきではない――とともに仕上げられていたと推定できるのではないだろうか。

参考文献

井上康・崎山政毅2017、『マルクスと商品語』、社会評論社

桜井英治1996、『日本中世の経済構造』、岩波書店

桜井英治2017、『交換・権力・文化　ひとつの日本中世社会論』、みすず書房

関根康正1995、『ケガレの人類学　南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会

細川涼一1994、『中世の身分制と非人』、日本エディタースクール

Anderson. Kevin.B. Marx at the Margins: On Nationalism, Ethnicity, and Non-Western Societies. Chicago:The University of Chicago Press.2010. 邦訳、ケヴィン・アンダーソン、平子友長〔監訳〕明石英人・佐々木隆治・斎藤幸平・隅田聡一郎〔訳〕、社会評論社2015年。

Gabriel. Markus and Slavoi Žižek. 2009. Mythology, Madness and Laughter: Subjectivity in German Idealism. NewYork: Continuum.

Kant. Immanuel. 2009. Kritik Der Urteilskaraft. Meiner Felix Verlag GmbH; Neuauflage.2009.イマニュエル・カント、篠田英雄〔訳〕、『判断力批判』上・下、岩波文庫1964

〈シンポジウム〉

今日の資本主義を批判するために ――――――

『マルクスと商品語』を読む

井上康・崎山政毅著『マルクスと商品語』(社会評論社 2017 年) は、マルクス『資本論』商品論研究の最新の成果である。そしてマルクスに依拠しつつ、今日のグローバル資本主義を批判するための思想的・理論的前提を世界的水準で実現した労作であり、現代社会批判を標ぼうしてきたポストモダニズム批評・存在論的脱構築批評に引導を渡そうとする論争の書でもある。新たな思想上の階級闘争を宣言したこのポレミックな書物を読み解く。

コメンテーター／

浅川雅己 札幌学院大学教員、経済学、『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』〔共著〕など

大橋完太郎 神戸大学教員、感性論・芸術論・表象文化論、『ディドロの唯物論』など

真島一郎 東京外国語大学教員、社会人類学、ヴュー・サヴァネ、バイ・マケベ・サル『ヤナマール セネガルの民衆が立ち上がるとき』〔監訳・解説〕など

中村勝己 中央大学兼任講師、イタリア政治思想史、ネグリ『戦略の工場　レーニンを超えるレーニン』〔共訳〕など

著者からのリプライ／

井上康 元予備校講師

崎山政毅 立命館大学教員

司会／

友常勉 東京外国語大学、日本思想史

関連企画　ルネ研合評会『マルクスと商品語』
日時：2018 年 7 月 1 日（日）13 時～
会場：専修大学神保町キャンパス（会議室未定）
コメンテーター：中村勝己ほか
主催：ルネサンス研究所（renesansken@gmail.com）

日時：**2018 年 6 月 30 日（土）13：30 ～ 17：30**

会場：**東京外国語大学本部管理棟　中会議室**（案内図❹）

東京都府中市朝日町 3-11-1

◆**JR 中央線**「武蔵境」駅のりかえ **西武多摩川線**「多磨」駅下車 徒歩 5 分

◆**京王電鉄**「飛田給」駅北口より多磨駅行き京王バスにて約10 分「東京外国語大学前」下車

主催：**〈『マルクスと商品語』を読む〉シンポジウム実行委員会**

〔連絡先〕友常勉 ttomotsune@tufs.ac.jp　ジョン・ポーター jporter@tufs.ac.jp

（事前申込・予約不要）